

大塩平八郎

森鷗外

青空文庫

一、西町奉行所

てんばう 天保八年 丁ひのととり 酉としの歳二月十九日の曉あけがた方七どきつ時に、大阪西
 しまちぶぎやうしよ 町奉行所の門をた敲くものがある。西町奉行所と云ふのは、大
 おほて 阪城の大手の方角から、内本町うちほんまちどほり通を西へ行つて、本町橋ほんまちばしに
 掛からうとする北側にあつた。此頃はもう四年前から引き続いて
 ききん 飢饉で、やれ盗人ぬすびと、やれ行倒ゆきだふれと、夜中やちゆうも用事が断たえな
 い。それにきのふの御用日ごようびに、月番つきばんの東町ひがしまち奉行所へ立会たちあひ
 に往いつて歸つてからは、奉行堀伊賀守利堅ほりいがのかみとしかたは何かひどく心せ
 はしい様子で、急に西組にしぐみよりき与力吉田勝右衛門かつゑもんを呼び寄せて、長い

間密談をした。それから東町奉行所との間に往反して、けふ十九日にある筈であつた堀の初入式の巡見が取りやめになつた。それから家老中泉撰司を以て、奉行所詰のもの一同に、夜中と雖、格別に用心するやうにと云ふ達しがあつた。そこで門を敲かれた時、門番がすぐに立つて出て、外に來たものの姓名と用事とを聞き取つた。

門外に來てゐるのは二人の少年であつた。一人は東組町同心、よしみくらうゑもん、せがれえいたらう吉見九郎右衛門の倅英太郎、今一人は同組同心河合郷左衛門の倅八十次郎と名告つた。用向は一大事があつて吉見九郎右衛門の訴状を持参したので、ぢきにお奉行様に差し出したいと云ふことである。

じやうげとも

上下共何か事がありさうに思つてゐた時、一大事と云つたので、それが門番の耳にも相応に強く響いた。門番は猶豫なく潜門もんをあけて二人の少年を入れた。まだ暁の白けた光が夜闇の衣きぬを僅に穿つてゐる時で、薄曇うすぐもりの空の下、風の無い、沈んだ空氣の中に、二人は寒げに立つてゐる。英太郎えいたろうは十六歳、八十次郎らうは十八歳である。

「お奉行様にぢきに差し上げる書付かきつけがあるのだな。」門番は念を押した。

「はい。ここに持つてをります。」英太郎ふところゆびが懷を指さした。

「お前がその吉見九郎右衛門の倅せがれか。なぜ九郎右衛門が自分で持つて来ぬのか。」

「父は病気で寝てをります。」

「^{いつたい}一体東のお奉行所附^{づき}のものの書付^{かきつけ}なら、なぜそれを西のお奉行所へ持つて来たのだい。」

「西のお奉行様にでなくては申し上げられぬと、父が申しました。
。」

「ふん。さうか。」門番は^{やそじらう}八十次郎の方に向いた。「お前はなぜ附いて来たのか。」

「大切な事だから、^{まちがひ}間違の無いやうに二人^{ふたり}で往^いけと、吉見のをぢさんが言ひ附けました。」

「ふん。お前は河合と言つたな。お前の親父様^{おやぢさま}は承知してお前をよこしたのかい。」

「父は正月の二十七日に出た切、きり帰つて来ません。」

「さうか。」

門番は二人の若者に対して、こんな問答をした。吉見の父が少年二人を密訴みつそに出したので、門番も猜疑心さいぎしんを起さずに応対して、却つて運びが好かつた。門番の聞き取つた所を、当番のものが中なかいづみに届ける。中泉が堀に申し上げる。間もなく堀の指図で、中泉が二人を長屋に呼び入れて、一応取り調べた上訴状そじやうを受け取つた。

堀は前役ぜんやく矢部駿河守定謙やべするがのかみさだかたの後のちを襲いで、去年十一月に西町奉行になつて、やうく今月二日に到着した。東西の町奉行は月つき番交代きばんかうたいをして職務おこなを行つてゐて、今月は堀が非番ひばんである。東

町奉行 あとべやましろのかみよしすけ 跡部山城守良弼 も去年四月に現職に任ぜられて、七

月に到着したのだから、まだ大阪には半年しかをらぬが、兎に角 とかく

一日の長があるの、堀は引き廻して貰ふと云ふ風になつてゐる。

町奉行になつて大阪に来たものは、初入式と云つて、前からゐ

る町奉行と一しよに三度に分けて市中を巡見する。初度が北組、

二度目が南組、三度目が天満組である。北組、南組とは大手

前は本町通 ほんまちどほり 北側、船場は安土町通 せんば あづちまちどほり、西横堀以西は神

田町通 だまちどほり さかひ を界にして、市中を二分してあるのである。天満組

とは北組の北界 きたざかひ になつてゐる大川より更に北方に当る地域

で、東は材木蔵 ざいもくぐら から西は堂島の米市場 どうじま こめいちば までの間、天満の青

物市場 をものいちば、天満宮、総会所等を含んでゐる。北組が二百五

十町、南組が二百六十一町、天満組が百九町ある。予定通にする
 と、けふは天満組を巡見して、最後に東照宮附近の与力町に
 出て、夕七つ時には天満橋筋長柄町を東に入る北側の、迎
 方東組与力朝岡助之丞が屋敷で休息するのであつた。迎
 方とは新任の奉行を迎へに江戸に往つて、町与力同心の総
 代として祝詞を述べ、引き続いて其奉行の在勤中、手許の用を
 達す^た与力一人同心二人で、朝岡は其与力である。然るにきのふの
 御用日の朝、月番跡部の東町奉行所へ立会に往くと、其前日十
 七日の夜東組同心平山助次郎と云ふものの密訴の事を聞せられ
 た。一大事と云ふ詞が堀の耳を打つたのは此時が始であつた。
 それからはどんな事が起つて来るかと、前晩も殆寝ずに心配し

てゐる。今中なかいづみ泉が一大事の訴状を持つて二人の少年が来たと云ふのを聞くと、堀はすぐにあの事だと思つた。堀のためには、中泉が英太郎の手から受け取つて出した書かきつけ付の内容は、未知みちの事の発明ではなくて、既知きちの事の証しょうけん驗として期待せられてゐるのである。

堀は訴状を披見ひけんした。胸を跳をどらせながら最初から読んで行くと、果はたしてきのふ跡部あとべに聞いた、あの事である。陰謀いんぼうの首領しゅりやう、その与党よたうなどの事は、前に聞いた所と格別の相違は無い。長文の訴状の末三分の二程は筆者九郎右衛門の身みがこひ圀である。堀が今少しく精くはしく知りたいと思ふやうな事は書いてなくて、読んでも読んでも、陰謀に対する九郎右衛門の立場、疑懼ぎく、愁訴しうそである。き

のふから氣に掛かつてゐる所謂いはゆる一大事がこれからどう發展して
 行くだらうか、それが堀自身にどう影響するだらうかと、とつお
 いつ考へながら読むので、動やもすれば二行も三行も読んでから、
 書いてある意味が少しも分かつてをらぬのに氣が附く。はつと思
 つては又読み返す。やうく読んでしまつて、堀の心の内には、
 きのふから知つてゐる事の外に、これ丈だけの事が残つた。陰謀の与
 党の中で、筆者と東組与力渡辺良左衛門わたなべりやうざゑもん、同組同心河合郷左
 衛門ゑもんとの三人は首領を諫いさめて陰謀を止めさせようとした。併しかし首
 領が聴かぬ。そこで河合は逐電ちくてんした。筆者は正月三日後に風を
 引いて持病が起つて寝てゐるので、渡辺を以て首領にことわらせ
 た。此このてい体では事を挙げられる日になつても所詮しよせん働く事は出来

ぬから、切腹して詫^わびようと云つたのである。渡辺は首領の返事を伝へた。そんならゆる／＼保養しろ。場合によつては立ち退^たけと云ふことである。これを伝へると同時に、渡辺は自分が是非なく首領と進退を共にすると決心したことを話した。次いで首領は倅^{せがれ}と渡辺とを見舞によこした。筆者は病中やう／＼の事で訴状を書いた。それを支配を受けてゐる東町奉行に出さうには、取次を頼むべき人が無い。そこで隔^{かくしよ}所^{みはか}を見計^たらつて托^{たくそ}訴^そをする。筆者は自分と倅^{せがれ}英太郎以下の血族との赦^{しやめん}免^{めん}を願ひたい。尤も自分^{もつと}は与^よ党^{たう}を召^めし捕^とられる時には、矢張^{やはり}召^めし捕^とつて貰^{もら}ひたい。或^そは其^そのあひだ^{のあひだ}に自殺するかも知れない。留^{とめ}置^{おき}、預^{あづ}けなど、云ふことにせられては、病体^{しの}で凌^{しか}ぎ兼ねるから、それは罷^{やめ}にして貰ひたい。

倅英太郎は首領の立てゝゐる塾で、人質のやうになつてゐて歸つて来ない。兎に角自分と一族とを赦免して貰ひたい。それから西組与力見習に内山彦次郎と云ふものがある。これは首領に嫉まれてゐるから、保護を加へて貰ひたいと云ふのである。

読んでしまつて、堀は前から懐いてゐた憂慮は別として、此訴状の筆者に対する一種の侮蔑の念を起さずにはゐられなかつた。形式に絡まれた役人生涯に慣れてはゐても、成立してゐる秩序を維持するために、賞讃すべきものにしてある返忠を、真の忠誠だと看することは、生れ附いた人間の感情が許さない。その上自分の心中の私を去ることを難んずる人程却つて他人の意中の私を託くに敏なるものである。九郎右衛門は一しよに召し捕られたい

と云ふ。それは責せめを引く潔いさぎよい心ではなくて、与党を怖おそれ、世間を憚はづかる臆病である。又自殺するかも知れぬと云ふ。それは覚束おぼつかない。自殺することが出来るなら、なぜ先まづ自殺して後に訴状を貽のこさうとはしない。又牢に入れてくれるなど云ふ。大阪の牢屋から生きて還かへるものゝ少いのは公然の秘密だから、病体でなくても、入らずに済すめば入るまいとする筈である。横わうちやくもの着者だとは思つたが、役馴やくなれた堀は、公儀こうぎのお役に立つ返かへりちゆう忠しゅうのものを周章やうの間にも非難しようとはしない。家老に言ひ付けて、少年二人を目通めどほりへ出させた。

「吉見英太郎と云ふのはお前か。」

「はい。」怜悧れいりらしい目を見張つて、存外おく怯れた様子もなく堀を

仰あふぎ視みた。

「父九郎右衛門は病気で寝てをるのぢやな。」

「風邪ふうじやの跡あとで持病あつの疝痛せんつうぢしつ痔疾ぢしつが起りまして、行歩ぎやうほが慍かなひま

せぬ。」

「書付かきつけにはお前は内へ歸られぬと書いてあるが、どうして歸られた。」

「父は歸られぬかも知れぬが、大變になる迄までに脱ぬけて出られるなら、出て来いと申し付けてをりました。さう申したのは十三日に見舞やそじらうに参つた時の事でございます。それから一しよに塾どきにある河合八十次郎と相談おほぜいいたしまして、昨晚四よつ時に抜けて歸りました。先生の所にはお客が大勢おほぜいありまして、混雜おほぜいいたしてゐましたの

で、出られたのでございます。それから。」英太郎は何か言ひさして口を噤んだ。

堀は暫く待つてゐたが、英太郎は黙つてゐる。「それからどういたした」と、堀が問うた。

「それから父が申しました。東の奉行所には瀬田と小泉とが当番で出てをりますから、それを申し上げいと申しました。」

「さうか。」東組与力瀬田濟之助せいのおすけ、同小泉淵次郎えんじろうの二人が連判れんぱんに加はつてゐると云ふことは、平山の口上こうじやうにもあつたのである。

堀は八十次郎の方に向いた。「お前が河合八十次郎か。」

「はい。」頬ほの円まるい英太郎と違つて、これは面長おもながな少年である

が、同じやうに小氣が利いてゐて、臆する氣色は無い。

「お前の父はどういたしたのぢや。」

「母が申しました。先月の二十六日の晩であつたさうでござい
す。父は先生の所から歸つて、火箸で打擲せられて残念だと
申したさうでございます。あくる朝父は弟の謹之助を連れて、
天満宮へ参ると云つて出ましたが、それ切どちらへ参つたか、
歸りません。」

「さうか。もう宜しい。」かう云つて堀は中泉を顧みた。

「いかが取り計らひませう」と、中泉が主人の氣色を伺つた。

「番人を附けて留め置け。」かう云つて置いて、堀は座を立つた。

堀は居間に歸つて不安らしい様子をしてゐたが、忙しげに手紙

を書き出した。これは東町奉行に宛てて、当方にも訴人^{そにん}があつた、
当番の瀬田、小泉に油断せられるな、追附^{おつつけ}参上すると書いたの
である。堀はそれを持たせて使^{つかひ}を出した跡^{あと}で、暫く腕組^{うでぐみ}をして
強^しひて気を落ち着けようとしてゐた。

堀はきのふ跡部^{あとべ}に陰謀者の方^{はうりやく}略^{りやく}を聞いた。けふの巡見を取
り止めたのはそのためである。然^{しか}るに只^{ただ}三月と書いて日附をせぬ
吉見の訴状には、その方略は書いてない。吉見が未明に倅^{せがれ}を托^{たくそ}訴
に出したのを見ると方略を知らぬのではない。書き入れる暇^{ひま}がな
かつたのだらう。東町奉行所へ訴へた平山は、今月十五日に渡辺
良左衛門が来て、十九日の手筈^{てはず}を話し、翌十六日に同志一同が集
まつた席で、首領が方略を打ち明けたと云つたさうである。それ

は跡部と自分とが与力朝岡の役宅やくたくに休息してゐる所へ襲おそつて来ようと思ふのである。一体吉見の訴状にはなんと云つてあつたか、それに添へてある檄文げきぶんにはどう書いてあるか、好く見て置かうと堀は考へて、書類を袖そでの中から出した。

堀は不安らしい目附めつきをして、二つの文書ぶんしよをあちこち見競みくらべた。陰謀いんぼうに対してどう云ふ手段を取らうと思ふ成案がないので、すぐに跡部あとべの所へ往かずに書面を遣やつたが、安座して考へても、思案が纏まとまらない。併しかし何かせずにはゐられぬので、文書を調べ始めたのである。

訴状には「御城おんしろ、御役所おんやくしよ、其外組屋敷等火攻の謀そのほかくみやしきとうひぜめはかりごと」と書いてある。檄文げきぶんには無道の役人を誅ちゆうし、次に金持の町人共を

懲こらすと云つてある。兎とに角恐かくろしい陰謀である。昨晚跡部からの書状には、慥たしかな与力共の言分いひぶんによれば、さ程の事でないかも知れぬから、兼かねて打ち合せたやうに捕方とりかたを出すことは見合みあせてくれと云つてあつた。それで少し安心して、こつちから吉田を出すことも控へて置いた。併し数人すにんの申分まをしぶんがかう符合して見れば、容易な事ではあるまい。跡部はどうする積つもだらうか。手紙を遣やつたのだから、なんとか云つて来さうなものだ。こんな事を考へて、堀は時の移るのをも知らずにゐた。

二、東町奉行所

東町奉行所で、奉行 あとべやましろのかみよしすけ 跡部山城守良弼が堀の手紙を受け取

つたのは、明六つ時頃 あけどき であつた。

大阪の東町奉行所は城の京橋口 きやうばしぐち の外、京橋通と谷町 たにまち との
角屋敷 かどやしき で、天満橋 てんまばし の南 みなみづめ 詰東側にあつた。東は城、西は谷

町の通である。南の島町通 しままちどほり には街を隔てて靱蔵 もみぐら がある。北

は京橋通の河岸 かし で、書院の庭から見れば、対岸天満組の人家が一
目に見える。只庭 ただ の外圍 ぐわいゐ に梅の立木 たちき があつて、少し展望 さへぎ を遮る
だけである。

跡部もきのふから堀と同じやうな心配をしてゐる。きのふの御
用日にわざと落ち着いて、平常の事務を片附けて、それから平山
の密訴 みつそ した陰謀に対する処置を、堀と相談して別れた後、堀が吉

田を呼んだやうに、跡部あとべは東組与力の中で、あれかこれかと慥たしかなものを選び抜いて、とう／＼荻野勘左衛門をぎのかんざゑもん、同人倅四郎助どうにせがわろすけ、磯い矢頼母そやたのもの三人を呼び出した。頼母たのもと四郎助とは陰謀の首領を師と仰いでゐるものではあるが、半年以上使つてゐるうちに、その師弟の關係は読書の上ばかりで、師の家とは疎遠にしてゐるのが分かつた。「あの先生は學問はえらいが、肝積持かんしやくもちで困ります」などと、四郎助が云つたこともある。「そんな男か」と跡部が聞くと、「矢部様の前でお話をしてゐるうちに激げきして来て、六寸もある金頭かながしらを頭からめり／＼と咬かん食べたさうでございます」と云つた。それに此三人は半年の間跡部の言ひ付けた用事を、人一倍ねんいり念入にしてゐる。そこを見込んで跡部が呼び出したのであ

る。

さて捕^{とり}方^{かた}の事を言ひ付けると、三人共思ひも掛けぬ様子で、

良久^{やう}しく顔を見合せて考へた上で云つた。平山が訴^うは^つた^へいかにも実^じ

事^{つじ}とは信ぜられない。例の肝^{かん}積^し持^{もち}の放言^{ほうげん}を真^まに受けたのでは

あるまいか。お受^うは^けはいたすが、余^よ所^そながら様子を見て、いよく

実^{じつ}正^{やう}と知れてから手を着けたいと、折り入つて申し出た。後

に跡部の手紙で此事を聞いた堀よりは、三人の態度を目^まのあたり

見た跡部は、一層切実に忌^{いま}々^くしい陰謀事件が謠^うか^そも知れぬと云

ふ想像に伴ふ、一種の安心を感じた。そこで逮捕を見合せた。

跡部は荻野等^{をぎの}の話^わを聞いてから考へて見て、平山に今一度一大

事を聞いた前後の事を精^くしく聞いて置けば好かつたと後悔した。

をとつひの夜平山が来て、用人ようにん野々村次平に取り次いで貰もらつて、
 所謂いはゆる一大事の訴うったへをした時、跡部は急に思案して、突飛とつびな手段を
 取つた。尋常なら平山を留とめ置いて、陰謀を鎮圧する手段を取る
 べきであるのに、跡部はその決心が出来なかつた。若し平山を留
 め置いたら、陰謀者が露頭を悟つて、急に事を挙げはすまいかと
 懼おそれ、さりとして平山を手放して此土地に置くのも心こゝろもと許ないと
 思つたのである。そこで江戸で勘定奉行になつてゐる前任西町奉
 行矢部駿河守定謙に当てた私信を書いて、平山にそれを持たせ
 て、急に江戸へ立たせたのである。平山はきのふ暁あけ七つ時に、小
 者多助ものたすけ、雇人やとひにん弥助やすけを連れて大阪を立つた。そして後のち十二日
 の二月二十九日に、江戸の矢部が邸やしきに着いた。

意志の確かでない跡部は、荻野等三人の詞をたやすく聴き納れて、逮捕の事を見合せたが、既にそれを見合せて置いて見ると、その見合せが自分の責任に帰すると云ふ所から、疑懼が生じて来た。延期は自分が極めて堀に言つて遣つた。若し手遅れと云ふ問題が起ると、堀は免れて自分は免れぬのである。跡部が丁度この新に生じた疑懼に悩まされてゐる所へ、堀の使が手紙を持つて来た。同じ陰謀に就いて西奉行所へも訴人が出た、今日当番の瀬田、小泉に油断をするなと云ふ手紙である。

跡部は此手紙を読んで突然決心して、当番の瀬田、小泉に手を着けることにした。此決心には少し不思議な処がある。堀の手紙には何一つ前に平山が訴へたより以上の事実を書いては無い。瀬

田、小泉が陰謀の与党だと云ふことは、既に平山が云つたので、荻野等三人に内命を下すにも、跡部は綿密な警戒をした。さうして見れば、堀の手紙によつて得た所は、今まで平山一人の訴で聞いてゐた事が、更に吉見と云ふものの訴で繰り返されたと云ふに過ぎない。これには決心を促す動機としての価値は殆無^{ほとんど}い。然るにその決心が跡部には出来て、前には腫物^{はれもの}に障^{さは}るやうにして平山を江戸へ立たせて置きながら、今は目前の瀬田、小泉に手を着けようとする。これは一昨日の夜平山の密訴^{みつそ}を聞いた時にすべき決心を、今偶然の機縁に触れてしたやうなものである。

跡部は荻野等と呼んで、二人を捕^{とら}へることを命じた。その手筈^{てはず}はかうである。奉行所に詰めるものは、先づ刀を脱^{だつ}して詰^{つめ}所の

刀かたな架かけに懸かける。そこで脇差わきざしばかり挿さしてゐて、奉行に呼ばれると、脇差をも畳廊下たゝみらうかに抜いて置いて、無腰むこしで御用談ごようだんの間まに出る。この御用談の間に呼んで捕へようと云ふのが手筈である。併しかし万一の事があつたら切り棄ほてる外ほかないと云ふので、奉行所に居合ゐあせた剣術の師いちでうは一条いちめ一きりが切棄すての役を引き受けた。

さて跡部は瀬田、小泉の二人を呼ばせた。それを聞いた時、瀬田は「暫時御猶予ざんじごいうよを」と云つて便所に起たつた。小泉は一人いつもの畳廊下たゝみらうかまで来て、脇差を抜いて下に置かうとした。此畳廊下の横手に奉行の近習部屋きんじゆがある。小泉が脇差を下に置くや否いなや、その近習部屋から一人の男が飛び出して、脇差に手を掛けた。

「はつ」と思つた小泉は、一旦手を放した脇差を又掴つかんだ。引き

合ふはずみに鞆さやはし走つて、とう／＼、小泉が手に白刃しらばが残つた。
様子を見てゐた跡部が、「それ、切り棄てい」と云ふと、弓の間
まで踏み出した小泉の背後うしろから、一条が百会ひやくゑの下へ二寸程切り
附けた。次に右の肩かたさき尖を四寸程切り込んだ。小泉がよろめく所
を、右の脇腹わきはらへ突を一本食はせた。東組与力小泉淵次郎えんじらうは十
八歳を一期いちごとして、陰謀第一の犠牲として命いのちを隕おとした。花のやう
な許嫁いひなづけの妻があつたさうである。

便所にゐた瀬田は素足すあしで庭へ飛び出して、一本の梅の木を足場
にして、奉行所の北側の堀へいを乗り越えた。そして天満橋てんまばしを北へ
渡つて、陰謀の首領大塩平八郎おほしほへいはちらうの家へ奔はしつた。

三、四軒屋敷

天満橋筋長柄町を東に入つて、角から二軒目の南側で、所謂四軒屋敷の中に、東組与力大塩格之助の役宅がある。主人は今年二十七歳で、同じ組与力西田青太夫の弟に生れたのを、養父平八郎が貰つて置いて、七年前にお暇になる時、番代に立たせたのである。併し此家では当主は一向当主らしくなく、今年四十五歳になる隠居平八郎が万事の指図をしてゐる。

玄関を上がつて右が旧塾と云つて、ここには平八郎が隠居する数年前から、その学風を慕つて寄宿したものがある。左は講堂で、読礼堂と云ふ匾額が懸けてある。その東隣が後に他家

を^{つづ}買ひ潰して広げた新^{しんじゆく}塾である。講堂の背後^{うしろ}が平八郎の書齋で、中^{ちゆうさい}齋と名づけてある。それから奥、東照宮の境内^{けいだい}の方^{へや／＼}へ向いた部屋^{かない}々々が家内のもの^{みどころ}の居所で、食事の時などに集まる広間には、鏡^{きやうちゆうかんくわくわん}中^{つゑ}看^{もと}花^{うなじ}館と云ふ匾^{へん}額^{がく}が懸^かかつてゐる。これだけの建物の内に起臥^{きぐわ}してゐるものは、家族でも学生でも、悉く平八郎が独裁^{どくさい}の杖の下に項^{むつゑ}を屈してゐる。当主格之助などは、旧塾に九人、新塾に十余人ある平^{ひら}の学生に比べて、殆^{ほとん}何等の特権^{をん}をも有してをらぬのである。

東町奉行所^{はくじん}で白刃^{した}の下を脱れて、瀬田^{せいのすけ}濟之助が此屋敷に駆け込んで来た時の屋敷は、決して此出来事^{せいてん}を青^{へき}天^{れき}の霹靂^{をんなこ}として聞^{あり}くやうな、平穩無事の光景^{さま}ではなかつた。家内^{かない}中の女子

ども
 供はもう十日前に悉く立ち退かせてある。平八郎が二十六歳で
 ばんだい
 番代に出た年に雇つた妾、曾根崎新地の茶屋大黒屋和市の娘ひ
 めかけ
 ろ、後の名ゆうが四十歳、七年前に格之助が十九歳で番代に出た
 はんによじむら
 時に雇つた妾、般若寺村の庄屋橋本忠兵衛の娘みねが十七歳、
 しま
 平八郎が叔父宮脇志摩の二女を五年前に養女にしたいくが九歳、
 ゆみた
 大塩家にゐた女は此三人で、それに去年の暮にみねの生んだ弓
 ちゆう
 太郎を付け、女中りつを連れさせて、ゆうがためには義兄、み
 たの
 ねがためには実父に当る般若寺村の橋本方へ立ち退かせたのであ
 る。

女子供がをらぬばかりでは無い。屋敷は近頃急に殺風景になつ
 かね
 てゐる。それは兼て門人の籍にゐる兵庫西出町の柴屋長太夫、
 にしてまち
 しばやちやうだいふ

其^{そのほか}外縁故のある商人に買つて納めさせ、又学生が失^{しつさく}錯をする
度^{たび}に、料^か料^{はり}の代に父兄に買つて納めさせた書籍が、玄関から講堂、
書齋へ掛けて、二三段に積んだ本箱の中にあつたのに、今月に入
つてからそれを悉^{ことごと}く運び出させ、土蔵にあつた一切^{いっさい}経^{きやう}などを
さへそれに加へて、書店河内屋喜兵衛、同新次郎^{しんじらう}、同記一兵衛^{きいちべゑ}、
同茂兵衛^{もへゑ}の四人の手で銀に換へさせ、飢饉^{なんぎ}続きのために難儀する
人民^{ほどこ}に施^{ほどこ}すのだと云つて、安堂寺町五丁目の本屋^{ほんやく}会^{かい}所^{しよ}で、
親類^{しゆわり}や門下生^{もんげ}に縁故のある凡^{およそ}三十三町村のもの一万軒^{いっせん}に、一軒^{いっけん}
朱^{しゆ}の割^{わり}を以て配^{もつ}つた。質素な家の唯一の装飾^{しやうしよく}になつてゐた書籍が
無くなつたので、家^{うち}はがらんとしてしまつた。

今一つ此家の外貌^{きざつ}が傷^{きず}けられてゐるのは、職人を入れて兵器弾

薬を製造させてゐるからである。町まち与力よりきは武芸を以て奉公して
 ゐる上に、隠居平八郎は玉造組たまつくりぐみ与力柴田勘兵衛しばたかんべゑの門人で、佐さ
 分利流ぶりりうの槍やりを使ふ。当主格之助は同組同心故人藤重孫三郎ふぢしげまごさぶらうの
 門人で、中島流の大筒おほづゝを打つ。中にも砲術家は大筒をも貯たくはへ火
 薬をも製する習ならひではあるが、此家では夫それが格別さかんに盛になつてゐる。
 去年九月の事であつた。平八郎は格之助の師藤重ふぢしげの倅良左衛せがれやうざゑも
 門もん、孫槌太郎つちたろうの兩人を呼んで、今年の春堺七堂さかひだうが浜で格之助
 に丁打ちやううちをさせる相談をした。それから平八郎、格之助の部屋
 の附近とじまりに戸締とじまりをして、塾生を使つて火薬を製させる。棒火矢ぼうひや、
 炮碌玉はうろくだまを作らせる。職人を入れると、口実を設けて再び外へ出
 さない。火矢ひやの材木を挽ひき切つた天満北木幡町てんまきたこばたまちの大工作兵衛さくべゑな

どがそれである。かう云ふ製造は昨晚まで続けられてゐた。大^{おほづ}

筒^ゝは人から買ひ取つた百目筒^{ひやくめづゝ}が一挺^{ちやう}、人から借り入れて返さ

ずにある百目筒^ゝが二挺、門人守口村^{もりぐちむら}の百姓兼質商白井孝右衛門^{しらみかうゑもん}

が土蔵^{そば}の側の松の木を伐^きつて作つた木筒^{きづゝ}が二挺ある。砲車^{はうしや}は石

を運ぶ台だと云つて作らせた。要するに此半年ばかりの間に、絃^げ

誦^{んしょうやうく}洋々^{やうやうく}の地が次第に喧^{けんさう}噪と雜 《ぎつたふ》とを常とす

る工場^{こうちやう}になつてゐたのである。

家がそんな模様^{もやう}になつてゐて、そこへ重立^{おもだ}つた門人共の寄り合

つて、夜^よの更^ふけるまで還らぬことが、此頃次第^{たびかさ}に度重^{たびかさ}なつて来

てゐる。昨夜は隠居^{めかけ}と当主との妾^{めかけ}の家元、摂津般若寺村^{せつつはんんにやじむら}の庄屋

橋本忠兵衛、物持^{ものもち}で大塩家の生計を助けてゐる摂津守口村^{もりぐちむら}の

百姓兼質屋白井孝右衛門、東組与力渡辺良左衛門、同組同心庄司しやう
 義左衛門じぎざゑもん、同組同心の倅近藤梶五郎かぢごろう、般若寺村の百姓柏岡かしはをか
 源右衛門、同倅伝七でんしち、河内門真三番村の百姓茨田郡次いはらたぐんじの八
 人が酒を飲みながら話をしてゐて、折々をり／＼いつもの人を圧伏あつづくす
 るやうな調子の、隠居の声が漏れた。平生最も隠居したしに親んでゐる
 此八人の門人は、とう／＼屋敷に泊まつてしまつた。此頃は客が
 あつてもなくても、勝手の為事しごとは、兼て塾まかなひの賄方まかなひをしてゐる
 すぎやまさんべい、杉山三平が、人夫を使つて取り賄まかなつてゐる。杉山は河内国
 衣摺村きぬすりむらの庄屋で、何か仔細しさいがあつて所ところ払ばらひになつたものださ
 うである。手近な用を達たすのは、格之助の若党大和国曾我村やまとのくにそがむらうま
 生れの曾我岩蔵いはざう、中ちゆう間げん木八きはち、吉助きちすけである。女はうたと云

ふ女中が一人、傍輩はうばいのりつがお部屋に附いて立ち退いた跡あとで、頻しきひとまに暇を貰ひたがるのを、宥め賺すかして引き留ひとめてあるばかりで、格別物の用には立つてゐない。そこでけさ奥にゐるものは、隠居平八郎、当主格之助、賄方まかなひかた杉山、若党曾我、中間木八、吉助、女中うたの七人、昨夜の泊客八人、合計十五人で、其外には屋敷内の旧塾、新塾の学生、職人、人夫など杯がゐたのである。

瀬田濟之助せいのみすけはかう云ふ中へ駆け込んで来た。

四、宇津木と岡田と

新塾にゐる学生のうちに、三年前に来て寄宿し、翌年一旦立ち

去つて、去年再び来た宇津木矩之允うつぎのりのすけと云ふものがある。平八郎の
 著あらはした大学刮目だいがくくわつもくの訓点くんてんを施ほどこした一人にんで、大塩の門人中学力
 の優すぐれた方である。此宇津木が一昨年九州に遊歴して、連れて来
 た孫弟子がある。これは長崎西築町にしつきまちの医師岡田道玄だうげんの子で、
 名を良之進りやうのしんと云ふ。宇津木に連れられて親元を離れた時が十四
 歳だから、今年十六歳になつてゐる。

この岡田と云ふ少年が、けさ六つ半に目を醒さました。職人が多
 く入り込むやうになつてから、随分騒がしい家ではあるが、けさ
 は又格別である。がたく、めりく、みしくと、物を打ち毀こは
 す音がする。しかと聴き定めようとして、床とこの上にすわつてゐる

うちに、今毀してゐる物が障子襖しやうぶすまだと云ふことが分かつた。それに雑まじつて人声がする。「役に立たぬものは討うち棄てい」と云ふ詞ことばがはつきり聞えた。岡田は伶俐れいりな、思慮のある少年であつたが、余り思ひ掛けぬ事なので、一旦夢ではないかと思つた。それから宇津木先生はどうしてゐるかと思つて、頸くびを延のばして見ると、先生はいつもの通とほりに着布団きぶたんの襟えりを頤あごの下に挿はさむやうにして寝てゐる。物音は次第に劇はげしくなる。岡田は心のはつきりすると共に、尋常でない此屋敷の現状が意識に上つて来た。

岡田は跳はね起おきた。宇津木の枕まくらもと元もとにゐざり寄つて、「先生」と声を掛けた。

宇津木は黙つて目を大きく開いた。眠つてはゐなかつたのであ

る。

「先生。えらい騒ぎでございますが。」

「うん。知つてをる。己おれは余り人を信じ過ぎて、君をまで危地きちに置いた。こらへてくれ給たまへ。去年の秋からの丁ちやううち打したくの支度しだくが、
 仰ぎやうさん山さんだとは己おれも思つた。それに門人中の老輩らうはい数人と、塾生の
 一半とが、次第に我々と疎遠になつて、何か我々の知らぬ事を
 知つてをるらしい素振そぶりをする。それを怪あやしいとは己おれも思つた。併しか
 し己はゆうべまで事の真相を看破することが出来なかつた。所ところが
 君、ゆうべ塾生一同に申し渡すことがあると云つて呼んだ、あの
 時の事だね。己は代りに聞いて来て遣やると云つて、君を残して置
 いて出席した。それから歸つて、格別な事でもないから、あした

話すと云つて寝たのだがね、実はあの時例の老輩共と酒宴をしてゐた先生が、^{ひと}独り席を起つて我々の集まつてゐる所へ出て来て、かう云つたのだ。一大事であるが、^{まへがた}お前方はどう身を処置するか承知したいと云つたのだ。^{おれ}己は一大事とは何事か問うて見た。先生はぎつとこんな事を説かれた。我々は平生良^{りやうち}知の学を攻めてゐる。あれは根本の教だ。^{をしへ}然るに今の天下の形勢は枝葉を病んでゐる。民の疲弊は窮^{ひへい}まつてゐる。草妨礙^{くさぼうがい}あらば、理亦宜しく^き去るべしである。天下のために残^{ざんぞく}賊を除かなくてはならぬと云ふのだ。そこで其残賊だがな。」

「はあ」と云つて、岡田は目を睜^{みは}つた。

「先づ町奉行衆位の所らしい。それがなんになる。我々は実^{まちぶぎやうしゆうくらゐ}

に先生を見損^{みそこな}つてをつたのだ。先生の眼中には將軍家もなければ、朝廷もない。先生はそこまでは考へてをられぬらしい。」

「そんなら今事^{こと}を挙げ^あげるのですね。」

「さうだ。家には火を掛け、与^{くみ}せぬものは切棄^{きりす}てゝ起^たつと云ふのだらう。併^{しか}しあの物音のするのは奥から書齋の辺だ。まだ旧塾もある。講堂もある。こゝまで来るには少し暇^{ひま}がある。まあ、聞き給^{たま}へ。例の先生の流義だから、ゆうべも誰一人抗争するものはない。己^{おれ}は明朝御返事をする^と云つて一時を糊塗^{こと}した。若^もし諫^{いさ}める機会があつたら、諫めて陰謀を思ひ止^とまらせよう。それが出来なかつたら、師となり弟子^{ていし}となつたのが命^{めい}だ、甘^{あま}んじて死なうと決心した。そこで君だがね。」

岡田は又「はあ」と云つて耳を欷^{そばだ}てた。

「君は中斎先生の弟子ではない。己^{おれ}は君に此場を立ち退^のいて貰^{もら}ひたい。挙兵の時期が最も好^{いい}い。若^もしどうすると問ふものがあつたら、お供^{とも}をすると云ひ給^{たま}へ。さう云つて置いて逃げるのだ。己^{おれ}はゆうべ寝られぬから墓誌銘を自撰^{じせん}した。それを今書いて君に遣^やる。それから京都^{ひがしほんぐわんじけ}東本願寺家の粟津陸奥之助^{あはづむつのすけ}と云ふものに、己の心血^{そく}を灑^そいだ詩文稿^{しぶんかう}が借してある。君は京都へ往つてそれを受け取つて、彦根にゐる兄下^{しもふさ}総の邸^{やしき}へ往つて大林権之進^{ごんのしん}と云ふものに逢つて、詩文稿に墓誌銘を添へてわたしてくれ給へ。」かう云ひながら宇津木^{うつぎ}はゆつくり起きて、机^{もた}に靠^たれたが、宿墨^{しゆくぼく}に筆^{ひた}を浸^{ひた}して、有^あり合せた美濃紙^{みのがみ}二枚に、一字の書損^{しよそん}もなく腹^ふ

藁くかうの文章を書いた。書き畢をはつて一読して、「さあ、これだ」と云つて岡田にわたした。

岡田は草稿を受け取りながら、「併しかし先生」と何やら言ひ出しさうにした。

宇津木は「ちよいと」と云ひ掛けて、便所へ立つた。

手に草稿を持った儘まゝ、ぢつとして考へてゐる岡田の耳に、廊下一つを隔てた講堂の口あたりから人声が聞えた。

「先生の指図さしづど通、宇津木を遣やつてしまふのだ。君は出口で見張つてゐてくれ給へ。」聞き馴なれた門人大井おほゐの声である。玉造組たまつくりぐみよりきせがれ、名は正一郎しやういちろうと云ふ。三十五歳になる。

「宜よろしい。しつかり遣やり給たまへ。」これは安田図書やすだづしよの声である。外げ

宮の御師で、三十三歳になる。

岡田はそつと立つて便所の戸口へ往つた。「殺しに來ます。」

「好い。君早く逃げてくれ給へ。」

「併し。」

「早くせんと駄目だ。」

廊下を忍び寄る大井の足音がする。岡田は草稿を懷に振ぢ込で、机の所へ小鼠のやうに走り戻つて、鉄の文鎮を手に持つた。そして跣足で庭に飛び下りて、植込の中を潜つて、堀にぴつたり身を寄せた。

大井は拔刀を手にして新塾に這入つて來た。先づ寢所の温みを探つてあたりを見廻して、便所の口に來て、立ち留まつた。

暫くして便所の戸に手を掛けて開けた。

中から無腰の宇津木が、恬然たる態度で出て来た。

大井は戸から手を放して一歩下がった。そして刀を構へながら言分らしく「先生のお指図だ」と云った。

宇津木は「うん」と云った切、棒立に立つてゐる。

大井は酔人を虎が食ひ兼ねるやうに、良久しく立ち竦んでゐる。

だが、やうく思ひ切つて、「やつ」と声を掛けて真甲を目掛

けて切り下した。宇津木が刀を受け取るやうに、俯向加減にな

つたので、百会の背後が縦に六寸程骨まで切れた。宇津木は其

儘立つてゐる。大井は少し慌てながら、二の太刀で宇津木の腹

を刺した。刀は臍の上から背へ抜けた。宇津木は縁側にぺたりと

すわつた。大井は背後へ押し倒して喉を刺した。

堀際にゐた岡田は、宇津木の最期を見届けるや否や、堀に沿うて東照宮の境内へ抜ける非常口に駆け附けた。そして錠前を文鎮で開けて、こつそり大塩の屋敷を出た。岡田は二十日に京都に立ち寄つて二十一日には彦根へ着いた。

五、門出

瀬田濟之助が東町奉行所の危急を逃れて、大塩の屋敷へ駆け込んだのは、明六つを少し過ぎた時であつた。

書斎の襖をあけて見ると、ゆうべ泊つた八人の与党、その外中

かせんばまち
船場町の医師の倅で僅に十四歳になる松本隣太夫、天満五丁

目の商人阿部長助、摂津沢上江村の百姓上田孝太郎、河

はち内門真三番村の百姓高橋九右衛門、河内弓削村の百姓西村利三

郎、河内尊延寺村の百姓深尾才次郎、播磨西村の百姓堀井

儀三郎、近江小川村の医師志村力之助、大井、安田等に取り

巻かれて、平八郎は茵の上に端坐してゐた。

身の丈五尺五六寸の、面長な、色の白い男で、四十五歳にし

ては老人らしい所が無い。濃い、細い眉は吊つてゐるが、張の強

い、鋭い目は眉程には吊つてゐない。広い額に青筋がある。鬚

は短く詰めて結つてゐる。月題は薄い。一度喀血したことが

あつて、口の悪い男には青瓢箪と云はれたと云ふが、現にもと

頷^{うなづ}かれる。

「先生。御用心をなさい。手入れがあります。」駆け込んで、平八郎が前にすわりながら、瀬田は叫んだ。

「さうだらう。巡^{じゅんけん}見^みが取^{とり}止^{やめ}になつたには、仔細^{しさい}がなうてはならぬ。江戸へ立つた平山の所^{しよゐ}為だ。」

「小泉は遣^やられました。」

「さうか。」

目を見合せた一座の中には、同情のささやきが起つた。

平八郎は一座をずつと見わたした。「兼^{かね}ての手筈^{てはず}の通りに打ち立^たたう。棄^がて置^たき難^{がた}いのは宇津木一人^{にん}だが、その処置は大井と安田に任せる。」

大井、安田の二人はすぐに起たとうとした。

「まあ待て。打ち立つてからの順序は、只第一段を除いて、すぐに第二段に掛かるまでぢや。」第一段とは朝岡の家を襲おそふことで、第二段とは北船場きたせんばへ進むことである。これは方略はうりやくに極めてあつたのである。

「さあ」と瀬田が声を掛けて一座を顧かへりみると、皆席を起つた。中で人夫の募集を受け合つてゐた柏岡かしはをか伝七と、檄文げきぶんを配る役になつてゐた上田とは屋敷を出て往つた。間もなく家財や、はづした建具たてぐを奥庭おくにはへ運び出す音がし出した。

平八郎は其儘端坐そのまゝたんざしてゐる。そして熱した心の内を、此陰謀がいかに萌芽はうがし、いかに生長し、いかなる曲折を経て今に至つた

と云ふことが夢のやうに往来する。平八郎はかう思ひ続けた。己おれが自分の材幹さいかんと値遇ちぐうによつて、吏胥りしよとして成し遂げられるだけの事を成し遂げた上で、身を引いた天保元年てんぽうは泰平であつた。民の休戚きうせきが米作べいさくの豊凶ほうきように繫かつてゐる国では、豊年は泰平である。二年も豊作であつた。三年から氣候が不順になつて、四年には東北の洪水のために、天明六七年以来の飢饉になつた。五年に稍常やうねに復しさうに見えるかと思ふと、冬から六年の春に掛けて雨がな。六年には東北に螟虫めいちゆうが出来る。海嘯つなみがある。とうく去年は五月から雨続きで、冬のやうに寒く、秋は大風たいふう大水いすゐがあり、東北を始はじめとして全国的不作になつた。己は隠居してから心を著述もつぱらに専こほんだいにして、古本大学刮目かくもく、洗心洞せんしんどう割記さつぎ、同

附録抄、儒門空虚聚語、孝經彙註の刻本が次第に完成
 し、割記を富士山の石室に蔵し、又足代権太夫弘訓の勸によ
 つて、宮崎、林崎の両文庫に納めて、学者としての志をも遂げた
 のだが、連年の飢饉、賤民の困窮を、目を塞いで見ずにはをられ
 なかった。そしてそれに対する町奉行以下諸役人の処置に平かな
 ることが出来なかった。賑恤もする。造酒に制限も加へる。
 併し民の疾苦は増すばかりで減じはせぬ。殊に去年から与力内山
 を使つて東町奉行跡部の遣つてゐる為事が氣に食はぬ。幕命に
 よつて江戸へ米を廻漕するのはい。併し些しの米を京都に
 輸ることをも拒んで、細民が大阪へ小買に出ると、捕縛するの
 は何事だ。己は王道の大体を学んで、功利の末技を知らぬ。上の

驕奢けうしやと下の疲弊しものひへいとがこれまでになつたのを見ては、己にも策の施すべきものが無い。併し理を以て推せば、これが人世じんせい必然の勢いきほひだとして旁看ぼうかんするか、町奉行以下諸役人や市中の富豪に進んで救済の法を講ぜさせるか、諸役人を誅ちゆうし富豪を脅おびして其私蓄しちくを散ずるかの三つより外ほかあるまい。己は此不平に甘んじて旁看ぼうかんしてはをられぬ。己は諸役人や富豪が大阪のために謀はかつてくれようとも信ぜぬ。己はどうく誅伐ちゆうばつと脅迫けふはくによつて事を済なさうと思ひ立つた。鹿台ろくたいの財を発するには、無道の商を滅むだうさんではならぬと考へたのだ。己が意を此こゝに決し、言を彼げんに託たたくし、格之助に丁打ちやうちをさせると称して、準備に取り掛つたのは、去年の秋であつた。それから不平の事は日を逐おうて加はつても、準備

はかど
 の歩つて行くのを顧みて、慰藉ゐしやを其中そのうちに求めてゐた。其間に半
 年立つた。さてけふになつて見れば、心に逡巡しゅんじゅんする怯おくれもない
 が、又踊躍ようやくする競きほひもない。準備をしてゐる久しい間には、折をり
 々、成功の時の光景が幻まぼろしのやうに目に浮かんで、地上に血を流す
 役人、脚下かうべたに頭を叩く金持、それから草木さうもくの風に靡なびくやうに來きた
 り附ふする諸民が見えた。それが近頃はもうそんな幻まぼろしも見えなくな
 った。己はまだ三十代で役を勤めてゐた頃、高井殿たかゐに信任せられ
 て、耶蘇やそ教徒を逮捕したり、奸吏かんりを糺弾きうだんしたり、破戒僧を羅致らち
 したりしてゐながら、老婆とよだみつき豊田貢はりつけの磔はりつけになる所や、両組りやうくみ与
 力きゆうげしんゑもん弓削新右衛門の切腹する所や、大勢おほぜいの坊主が珠数じゆずつなぎ繫にせ
 られる所を幻まぼろしに見ることがあつたが、それは皆間もなく事實にな

つた。そして事実になるまで、己おれの胸には一度も疑うたがひが萌きざさなかつた。今度はどうもあの時とは違ふ。それにあの時は己の意図が先まづ恣ほしいまゝに動いて、外界げかいの事柄がそれに附随して来た。今度の事になつてからは、己は準備をしてゐる間、何時いつでも用に立てられる左さ券けんを握つてゐるやうに思つて、それを慰藉ゐしやにした丈だけで、動もすれば其準備を永く準備の儘ままで置きたいやうな気がした。けふまでに事柄の捗はかどつて来たのは、事柄其物が自然に捗はかどつて来たのだと云つても好い。己おれが陰謀を推して進めたのではなくて、陰謀が己を拉らっして走つたのだと云つても好い。一体此終局このはどうなり行くだらう。平八郎はかう思ひ続けた。

平八郎が書齋で沈思してゐる間に、事柄は實際自然に捗はかどつて行

く。屋敷中に立ち別れた与党の人々は、受持ちうけもち々々の為事しごとをする。

時々書斎の入口まで来て、今宇津木を討ち果したとか、今奥庭おくには

に積み上げた家財に火を掛けたとか、知らせるものがあるが、其そのたびごと

度毎に平八郎は只一目そつちを見る丈だけである。

さていよく勢せい揃ぞろをすることになった。場所は兼かねて東照宮

の境内けいだいを使ふことにしてある。そこへ出る時人々は始て非常口

の錠ぢやう前まへの開あいてゐたのを知つた。行列の真まつ先さきに押し立てた

のは救民と書いた四半はんの旗である。次に中に天照皇大神宮、

右に湯武両聖王、左に八幡大菩薩と書いた旗、五七の桐きりに

二つ引びきの旗を立てゝ行く。次に木筒きづつが二挺ちやう行く。次は大井と庄司

とで各小筒おのこづつを持つ。次に格之助が着込きこみの袴ばかまで、白木綿しろもめんの鉢はちま

巻きを締しめて行く。しもつじむら下辻村の獵師れふしきんすけ金助がそれに引き添ふ。次

に大筒おほづゝが二挺と鑓やりを持った雑人ざふにんとが行く。次に略格ぼくかく之助と同

じ支度の平八郎が、黒羅紗くろらしやの羽織、野袴のばかまで行く。茨田いばらたと杉

山やまとが鑓やりを持つて左右に随ふ。若党わかたうそが曾我と中ちゆうげん間きはち木八、吉きちす

助けとが背後うしろに付き添ふ。次に相図あひづの太鼓が行く。平八郎の手に

は高橋、堀井、安田、松本等の与党おもたがある。次は渡辺、志村、近

藤、深尾、父柏岡等重立おもたつた人々で、特に平八郎に親ことしい白井や

橋本も此中こちゆうにゐる。一同着込きこ帯刀たいたうで、多くは手鑓てやりを持つ。押おさへ

は大筒おほづゝ一挺を挽ひかせ、小筒持こづゝもちの雑人ざふにん二十人を随へた瀬田で、

傍そばに若党植松周次うゑまつしうじ、中間浅佶あさきちが附ついてゐる。

此この総人数そうにんず凡百余人が屋敷に火を掛け、表おもて側がはの堀へいを押し倒

して繰り出したのが、朝五つ時^{どき}である。先づ主人の出勤した跡^{あと}の、
 向屋敷朝岡の門に大筒の第一発を打ち込んで、天満橋筋^{てんまばしすぢ}の長^な
 柄町^{がらまち}に出て、南へ源八町^{げんぱちまち}まで進んで、与力町^{よりきまち}を西へ折れた。
 これは城と東町奉行所とに接してゐる天満橋を避けて、迂回^{うくわい}し
 て船場^{せんば}に向はうとするのである。

六、坂本鉉之助

東町奉行所で小泉を殺し、瀬田を取り逃がした所へ、堀が部下
 の与力^{よりき}同^{どう}心^{しん}を随^{したが}へて来た。跡部^{あとべ}は堀と相談して、明六つ時^{あけどき}にや
 うく三箇条の手配^{てくぱり}をした。鈴木町^{すゞきまち}の代官根本善左衛門^{ねもとぜんざゑもん}に近^き

郷んがうの取締とりしまりを托したのが一つ。谷町たにまちの代官池田岩之丞いはのじように天満てんまの東照宮、建けん国寺方面こくじの防備を托したのが二つ。平八郎の母の兄、東組与力おほにしよごろう大西与五郎びやうきびきが病氣引びやうきびきをしてゐる所つかひへ使を遣つて、甥をひ平八郎に切腹させるか、刺し違へて死ぬるかのをうちを選べと云はせたのが三つである。与五郎の養子善之進は父のために偵察しようとして長柄町ながらまち近くへ往くと、もう大塩の同勢どうぜいが繰り出すので、驚いて逃げ帰り、父と一しよに西の宮へ奔りはし、又懼おそれて大阪へ引き返ししなに、両刀を海に投げ込んだ。

大西つかひへ使を遣つた跡あとで、跡部、堀の両奉行は更に相談して、両組の与力同心を合併した捕手とりてを大塩が屋敷へ出した。そのうち朝五つ近くなると、天満てんまに火の手が上がつて、間もなく砲声が聞え

た。捕手とりては所詮しよせん近寄れぬと云つて歸つた。

両奉行は鉄砲奉行いしわたひこだいふ石渡彦太夫、御手洗伊右衛門みたらしいゑもんに、鉄砲同心

を借りに遣つたや。同心は二人の部下を併せてあは四十人である。次に

それでは足らぬと思つて、玉造たまつくりぐちやうばん口定番はたさあきのすけ遠藤たちまのかみたねをさ但馬守胤統

に加勢を願つた。遠藤は公用人はたさあきのすけ畑佐秋之助に命じて、玉造組与

力つきばんで月番同心支配をしてゐる坂本鉉之助げんのすけを上屋敷かみやしきに呼び出

した。

坂本は荻野流をぎのりうの砲術者で、けさ丁打ちやうちをすると云つて、門

人を城の東裏ひがしうらにある役宅の裏庭に集めてゐた。そのうち五つ

頃になると、天満に火の手が上がつたので、急いで役宅から近い

大番所おほばんしよへ出た。そこに月番の玉造組平与力ひらよりき本多為助ほんだためすけ、山やま

寺三三郎、小島鶴之丞つるのじようが出てゐて、本多が天満の火事は大塩平八郎の所為しよゐだと告げた。これは大塩の屋敷でいりに出入する獵師清五郎と云ふ者が、火事場に駆け附けて引き返し、同心支配岡翁をうすけ助に告げたのを、岡が本多に話したのである。坂本はすぐに城の東裏にある同じ組の与力同心に総出仕そうしゆつしの用意を命じた。間もなく遠藤の総出仕の達しが来て、同時に坂本は上屋敷かみやしきへ呼ばれたのである。

畑佐はたさの伝へた遠藤の命令はかうである。同心支配一人、与力二人、同心三十人鉄砲を持つて東町奉行所へ出て来い。又同文の命令を京橋組へも伝達せいと云ふのである。坂本は承知むねの旨を答へて、上屋敷から大番所へ廻つて手配てくぱりをした。同心支配は三人あ

るが、これは自分が出ることにし、小頭こがしらの与力二人には平与ひらより力き蒲生熊次郎、本多ためすけ為助を当て、同心三十人は自分と同役岡との組から十五人宛出づだすことにした。集合の場所は土橋どばしと極めた。京橋組への伝達には、当番与力脇勝太郎わきに書附を持たせて出して遣つた。

手配てくぱりが済んで、坂本は役宅やくたくに歸つた。そして火事装束くわじしやうぞく、草鞋掛わらぢかけで、十文目筒じふもんめづを持つて土橋どばしへ出向いた。蒲生がまふと同心三十人とは揃つてゐた。本多はまだ来てゐない。集合を見に来てゐた畑佐はたさは、跡部あとべに二度催促せられて、京橋口へ廻まはつて東町奉行所に往くことにして、先へ歸つたのださうである。坂本は本多がために同心一人にんを留とめて置いて、集合地を発した。堀端ほりばたを西へ、

東町奉行所を指して進むうちに、跡部からの三度目の使者に行き合つた。本多と残して置いた同心とは途中で追ひ附いた。

坂本が東町奉行所に来て見ると、畑佐はまだ来てゐない。東組与力朝岡助之丞と西組与力近藤三右衛門とが応接して、大筒おほづゝを用意して貰ひたいと云つた。坂本はそれまでの事には及ばぬと思ひ、又指図の区々まちくなのを不平に思つたが、それでも馬一頭を借りて蒲生がまふを乗せて、大筒を取り寄せさせに、玉造口定番所ぢやうばんしよへ遣つた。昼四つ時よどきに跡部が坂本を引見した。そして坂本を書院の庭に連れて出て、防備の相談をした。坂本は大川に面した北手きたての展望を害する梅の木を伐ること、島町しままちに面した南手の控ひかへば柱しらと松の木とに丸太を結び附けて、武者走の板をわたすこと

を建議した。混雜の中で、跡部の指図は少しも行はれない。坂本は部下の同心に工事を命じて、自分でそれを見張つてゐた。

坂本が防備の工事をしてゐるうちに、跡部は大塩の一行が長ながら柄町まちから南へ迂廻うくわいしたことを聞いた。そして杣人足そまにんそくの一組てんじんばしに天神橋なんばばしと難波橋との橋板をこはせと言ひ付けた。

坂本の使者脇は京橋口へ往つて、同心支配広瀬治左衛門ひろせぢざゑもん、馬場ばば佐十郎さじふらうに遠藤の命令を伝達した。これは京橋口定番米津ぢやうばんよねづた丹後守昌寿んごのかみまさひさが、去年十一月に任命せられて、まだ到着せぬの

で、京橋口も遠藤が預りになつてゐるからである。広瀬は伝達の手書附を見て、首を傾けて何やら思案してゐたが、脇へはいづれ何方から出向うけたまはいて承らうと云つた。

広瀬は雪駄穿せつたばきで東町奉行所に来て、坂本に逢つてかう云つた。

「只今書面を拝見して、これへ出向いて参りましたが、ぐわんらい原 来

お互たがひに御城警固おんしろけいこの役柄ではありませんか。それをお城の外で使

はうと云ふ、遠藤殿の思おぼしめし召めいが分かり兼ねます。貴殿きでんはどう考

へられますか。」

坂本は目を睜みはつた。「成程なるほど自分の役柄は拙者せつしゃも心得てをり

ます。併しかし頭遠藤殿の申まを付つけであつて見れば、縦たとひ生駒山いこまやまを

越してでも出張せんではなりますまい。御覧とほりの通拙者うちしたくは打支度

をいたしてをります。」

「いや。それは頭御自身かしらが御出馬になることなら、拙者もどちら

へでも出張しませう。我々ばかりがこんな所へ参つて働いては、

町奉行の下知げちうけを受けるやうなわけで、体面にも係かゝるではありませんか。先年出しゅつする水の時、城代松平伊豆守殿へ町奉行が出兵を願つたが、大切の御城警固おんしろけいごの者を貸すことは相成らぬと仰おつしやつたやうに聞いてをります。一応御一しよにことわつて見ようぢやありませんか。」

「それは御同意がなり兼ねます。頭かしらの申まを付つけなら、拙者は誰の下したにでも附いて働きます。その上叛逆人ほんぎやくにんが起つた場合は出しゅつ水すゐなどとは違ひます。貴殿がおことわりになるなら、どうぞお一人で上屋敷かみやしきへお出いでになつて下さい。」

「いや。さう云ふ御所存ですか。何事によらず両組相談の上で取り計らふ慣例でありますから申し出だしました。さやうなら以後御

相談は申しますまい。」

「已^やむを得ません。いかやうとも御勝手になさりませい。」

「然^{しか}らばお暇^{いとま}ませう。」広瀬は町奉行所を出ようとした。

そこへ京橋口を廻つて来た畑^{はたさ}佐が落ち合つて、広瀬を引き止めて利害を説いた。広瀬はしぶりながら納得して引き返したが、暫^{しばら}くして同心三十人を連れて来た。併^{しか}し自分は矢張雪駄^{せつたばき}穿^きで、小筒^づも何も持たなかつた。

坂本は庭に出て、今工事を片付けて持^{もち}口^{くち}に附いた同心共を見張^あつてゐた。そこへ跡部^{あとべ}は、相役堀^{あひやく}を城代^{どうおほひのかみとしつら}土井大炊頭利位^{どおほひのかみとしつら}の所へ報告に遣^やつて置いて、書院から降りて来た。そして天満^{てんま}の火事を見てゐた。強くはないが、方角の極^きまらぬ風が折々吹くので、

火は人家の立て込んでゐる西にしみなみ南の方へひろがつて行く。大塩の進む道筋を聞いた坂本が、「いかがでございませう、御出馬になりましては」と跡部に言つた。「されば」と云つて、跡部は火事を見てゐる。暫くして坂本が、「どうもなか／＼こちらへは参りますまいが」と云つた。跡部は矢張「されば」と云つて、火事を見てゐる。

七、船場

大塩平八郎は天満与力町てんまよりきまちを西へ進みながら、平生私曲しきよくのあ
るやうに思つた与力の家々に大筒を打ち込ませて、夫婦町めうとまちの四よ

つづし

辻から綿屋町わたやまちを南へ折れた。それから天満宮の側そばを通つて、

天神橋に掛かった。向うを見れば、もう天神橋はこはされてゐる。ここまで来るうちに、兼かねて天満に火事があつたら駆け附けてくれと言ひ付けてあつた近郷きんがうの者が寄つて来たり、途中で行き逢つて誘はれたりした者があるので、同勢三百人ばかりになつた。不意に馳はせ加はつたものの中に、砲術の心得こころえのある梅田源左衛門うめだげんざゑもんと云ふ彦根浪人もあつた。

平八郎は天神橋のこはされたのを見て、菅原町河岸すがはらまちかしを西に進んで、門樋橋かどひばしを渡り、樋上町河岸ひかみまちかしを難波橋なんばばしの袂たもとに出た。見れば天神橋をこはしてしまつて、こちらへ廻つた杣人足そまにんそくが、今難波橋の橋板を剥はがさうとしてゐる所である。「それ、渡れ」と云

ふと、格之助が先に立つて橋に掛かった。人足は抜身ぬきみの鎧やうりを見て、ばら／＼と散った。

北浜二丁目の辻に立つて、平八郎は同勢の渡つてしまふのを待った。そのうち時刻は正午になつた。

方略の第二段に襲撃を加へることにしてある大阪富豪の家々は、北船場きたせんばに簇むらがつてゐるので、もう悉く指顧しこの間あひだにある。平八郎は倅格せがれ之助、瀬田以下の重立おもだつた人々を呼んで、手筈てはずの通とほりに取り掛かれと命じた。北側の今橋筋いまばしすぢには鴻池屋善右衛門こうのいけや、同庄兵衛、同善五郎、天王寺屋五兵衛、平野屋五兵衛等の大商人おほしやうにんがある。南側の高麗橋筋かうらいばしすぢには三井、岩城柵屋等いはきますやの大店おほみせがある。誰がどこに向ふと云ふこと、どう脅喝けふかつしてどう談判すると云ふ

こと、取り出した金銭米穀はどう取り扱ふと云ふこと扱なは、一いち々方略とに取り極きめてあつたので、ここでも為事しごとは自然に発展した。只錢穀せんこくの取扱とりあつかひだけは全く予定した所と相違して、雑ざ人共んどもは身に着つけられる限の金銀を身に着けて、思ひくのに立ち退のいてしまった。鴻池こうのいけ本家の外ほかは、大抵金庫かねぐらを破壊せられたので、今橋筋には二分金にぶきんが道にばら蒔まいてあつた。

平八郎は難波橋なんばばしの南詰みなみづめに床几しやうぎを立てさせて、白井、橋本、其外若党わかたう中間ちゆうげんを傍そばにをらせ、腰に附けて出た握飯にぎりめしを噛かみながら、砲声とづろの轟き渡り、火焰くわえんの燃え上がるのを見てゐた。そして心の内には自分が兼て排斥した枯寂こじやくの空くうを感じてゐた。昼八どきつ時に平八郎は引上ひきあげの太鼓を打たせた。それを聞いて

寄り集まつたのはやうく百五十人許りであつた。その重立つた人々の顔には、言ひ合せた様な失望の色がある。これは富豪を懲すことは出来たが、窮民を賑すことが出来ないからである。切角発散した鹿台の財を、徒に烏合の衆の攫み取るに任せたからである。

人々は黙つて平八郎の気色を伺つた。平八郎も黙つて人々の顔を見た。暫くして瀬田が「まだ米店が残つてゐましたな」と云つた。平八郎は夢を揺り覚されたやうに床几を起つて、「好い、そんなら手配をせう」と云つた。そして残の人数を二手に分けて、自分達親子の一手は高麗橋を渡り、瀬田の一手は今橋を渡つて、内平野町の米店に向ふことにした。

八、高麗橋、平野橋、淡路町

土井の所へ報告に往つた堀が、東町奉行所に歸つて来て、跡部あとべに土井の指図さしづを伝へた。両町奉行に出馬せいと指図したのである。「承知いたしました。そんなら拙者は手の者と玉造組たまつくりぐみとを連れて出ることにはいたしませう。」跡部はかう云つた儘まますわつてゐた。

堀は土井の機嫌の悪いのを見て来たので、気がせいゐてゐた。そこで席を離れるや否やいな、部下の与力同心を呼び集めて東町奉行所の門前に出た。そこには広瀬が京橋組の同心三十人に小筒こづつを持た

せて来てゐた。

「どこの組か」と堀が声を掛けた。

「京橋組でござります」と広瀬が答へた。

「そんなら先手さきでに立て」と堀が号令した。

同階級の坂本に対しては命令の筋道を論じた広瀬が、奉行の詞ことばを聞くと、一も二もなく領承した。そして鉄砲同心を引き纏まとめて、

西組与力同心の前に立つた。

堀の手は島町通しまうちどほりを西へ御祓筋おはらひすぢまで進んだ。丁度大塩父子ふしひきの率

ゐた手が高麗橋に掛かった時で、橋の上に白旗しらはたが見えた。

「あれを打たせい」と、堀が広瀬に言つた。

広瀬が同心等に「打て」と云つた。

同心等の持つてゐた三文目五分筒もんめ ぶんづいが煎豆いりまめのやうな音を立てた。

堀の乗つてゐた馬が驚いて跳ねたは。堀はころりと馬から墜ちたお。

それを見て同心等は「それ、お頭かしらが打たれた」と云つて、ぱつと散つた。堀は馬丁ばていに馬を牽かせて、御祓筋おはらひすぢの会所くわいしよに這入つ

て休息した。部下を失つた広瀬は、暇いとま乞ごをして京橋口に歸つ

て、同役馬場に此顛末このてんまつを話して、一しよに東町奉行所前まで来

て、大川おほかはを隔てて南北両方にひろがつて行く火事を見てゐた。

御祓筋おはらひすぢから高麗橋までは三丁余あるので、三文目五分筒もんめ ぶんづいの

射撃を、大塩の同勢どうぜいは知らずにしまった。

堀あとが出た跡あとの東町奉行所へ、玉造口へ往つた蒲生がまふが大筒を受け

取つて歸つた。蒲生は遠藤の所へ乗り付けて、大筒の事を言ごんじや

上うすると、遠藤は岡翁をうすけ助に当てて、平与力ひらよりき四人に大筒を持

たせて、目附中井半左衛門方へ出せと云ふ達しをした。岡は柴田

勘兵衛、石川彦兵衛に百目筒めづを一挺宛ちやづ、脇勝太郎、米倉倬次郎よねくらたくじらう

に三十目筒一挺宛を持たせて中川方へ遣やつた。中川がをらぬので、

四人は遠藤にことわつて、蒲生と一しよに東町奉行所へ来たので

ある。跡部あとべは坂本が手の者と、今到着した与力四人とを併あはせて、

玉造組の加勢与力七人、同心三十人を得たので、坂本を先に立て

て出馬した。此一手は島町通を西へ進んで、同町二丁目の角から、

内骨屋町筋うちほねやまちすぢを南に折れ、それから内平野町うちひらのまちへ出て、再び西へ

曲らうとした。

此時大塩の同勢は、高麗橋を渡つた平八郎父子の手と、今橋を渡つた瀬田の手とが東横堀川の東河岸に落ち合つて、南へうちひらのまち内平野町まで押して行き、米店数軒に火を掛けて平野橋のひがしづめ東詰に引き上げてゐた。さうすると内骨屋町筋から、神明の社の角をこつちへ曲がつて来る跡部の纏が見えた。二町足らず隔たつた纏を目当に、格之助は木筒を打たせた。跡部の手は停止した。与力本多や同心山崎弥四郎が、坂本に「打ちませうか」と催促した。

坂本は敵が見えぬので、「待て」と制しながら、神明の社の角に立つて見てゐると、やうく烟の中に木筒の口が現れた。「さあ、打て」と云つて、坂本は待ち構へた部下と一しよに小筒

をつるべかけた。

烟が散つてから見れば、もう敵は退いて、道が橋はしむかう向まで開いてゐる。橋詰はしづめ近く進んで見ると、雑人ざふにんが一人打たれて死んでゐた。

坂本は平野橋へ掛からうとしたが、東詰むせの両側の人家が焼けてゐるので、烟に噎むせんで引き返した。そして始はじめて敵に逢つて混乱してゐる跡部の手の者を押し分けながら、天神橋筋を少し南へ抜けて、豊後町ぶんごまちを西へ思案橋に出た。跡部は混乱の渦中に巻き込まれてとう／＼落馬した。

思案橋を渡つて、瓦町かはらまちを西へ進む坂本の跡には、本多、蒲が生の外まふ、同心山崎弥四郎、糟谷助蔵等かすやすけざうが切れ／＼に続いた。

平野橋で跡部の手と衝突した大塩の同勢どうぜいは、又逃亡者が出た

ので百人余あまりになり、浅手あさでを負つた庄司に手当をして遣つて、平野

橋の西詰から少し南へよぢれて、今淡路町あはぢまちを西へ退く所である。

北の淡路町を大塩の同勢が一步先に西へ退くと、それと併行し

た南の瓦町かはらまちどほり通を坂本の手の方が一步遅れて西へ進む。南北

に通じた町を交叉かうさする毎に、坂本は淡路町の方角を見ながら進む。

一丁目筋と鍛冶屋町筋との交叉点では、もう敵が見えなかつた。

堺筋さかひすぢとの交叉点に来た時、坂本はやうく敵の砲車を認め

た。黒羽織くろぼおりを着た大男がそれを挽ひかせて西へ退かうとしてゐる

所である。坂本は堺筋さかひすぢ西側の紙屋の戸口に紙荷かみにの積んである

のを小楯こだてに取つて、十文目筒もんめづゝで大筒方らしい、彼黒羽織かのを狙ねら

ふ。さうすると又東側の用水桶の蔭から、大塩方の獵師金助が獵れふ。筒づつで坂本を狙ふ。坂本の背後うしろにゐた本多が金助を見付けて、自分の小筒こづつで金助を狙ひながら、坂本に声を掛ける。併し二度まで呼んでも、坂本の耳に入らない。そのうち大筒方が少しづつ西へ歩くので、坂本は西側の人家に沿うて、十間程けんほど前へ出た。三人の筒は殆ほとんど同時に発射せられた。

坂本の玉は大砲たいほう方の腰を打ち抜いた。金助の玉は坂本の陣ちんをさかすつたが、坂本は只顔ただに風が当つたやうに感じただけであつた。本多の玉は全く的まとをはづれた。

坂本等は稍久やしく敵と鉄砲を打ち合つてゐたが、敵がもう打たなくなつたので、用心しつゝ淡路町の四辻に出た。西の方を見れ

ば、もう大塩の同勢は見えない。東の方を見れば、火が次第に燃えて来る。四辻の辺に敵の遺棄した品々を拾ひ集めたのが、百目筒三挺車台付、木筒二挺内一挺車台付、小筒三挺、其外鑓、旗、太鼓、火薬葛籠、具足櫃、長持等であつた。鑓のうち一本は、見知つたものがあつて平八郎の持鑓だと云つた。玉に中つて死んだものは、黒羽織の大筒方の外には、淡路町の北側に雑人が一人倒れてゐるだけである。大筒方は大筒の側に仰向に倒れてゐた。身の丈六尺余の大男で、羅紗の黒羽織の下には、黒羽二重紅裏の小袖、八丈の下着を着て、裾をか上げ、袴も股引も着ずに、素足に草鞋を穿いて、立派な拵の大を帯びてゐる。高麗橋、平野橋、淡路町の三度の衝突で、大

塩方の死者は士分一人、雑人ざふにん二人に過ぎない。堀、跡部の両奉行の手には一人の死傷もない。双方から打つ玉は大抵頭の上を越して、堀筋さかひすぢでは町家の看板が蜂の巣はちのやうに貫かれ、檐口のきぐちの瓦が砕くだかれてゐたのである。

跡部は大筒方あとべ おほづかたの首を斬らせて、鎧やりさき先に貫かせ、市中しちゆうを持ち歩かせた。後にこの戦死した唯一さむらひの士が、途中から大塩の同どうぜ勢いに加はつた浪人梅田だと云ふことが知れた。

跡部が淡路町あはぢまちの辻にゐた所へ、堀が来合せた。堀は御祓筋きははの会くわいしよ所で休息してゐると、一旦散つた与力同心よりきどうしん心が又ぽつ／＼寄つて来て、二十人ばかりになつた。そのうち跡部の手が平ひらの野橋のばしの敵を打ち退けたので、堀は会所を出て、内平野町うちひらのまちで跡

部に逢つた。そして二人相談した上、堀は跡部の手にゐた脇、石川、米倉の三人を借りて先手を命じ、天神橋筋を南へ橋詰町迄出て、西に折れて本町橋を渡つた。これは本町を西に進んで、迂廻して敵の退路を絶たうと云ふ計画であつた。併し一手のものが悉く跡へくとすがるので、脇等三人との間が切れる。人数もぼつと耗つて、本町堀筋では十三四人になつてしまふ。そのうち瓦町と淡路町との間で鉄砲を打ち合ふのを見て、やうく堀筋を北へ、衝突のあつた処に駆け付けたのである。跡部は堀と一しよに淡路町を西へ踏み出して見たが、もう敵らしいものの影も見えない。そこで本町橋の東詰まで引き上げて、二人は袂を分ち、堀は石川と米倉とを借りて、西町奉行所へ

連れて帰り、跡部は城へ這入^{はひ}つた。坂本、本多、蒲生^{がまふ}、柴田、脇並^{ならび}に同心等は、大手前^{おほてまへ}の番場^{ばんば}で跡部に分れて、東町奉行所へ帰つた。

九、八軒屋、新築地、下寺町

梅田の挽^ひかせて行く大筒^{おほづつ}を、坂本が見付けた時、平八郎はまだ淡路町二丁目の往来の四辻に近い処に立ち止まつてゐた。同勢は見る／＼耗^へつて、大筒^{おほづつ}の車を挽^ひく人足^{にんそく}にも事を闕^かくやうになつて来る。坂本等の銃声が聞えはじめてからは、同勢^{ほとんど}が殆無節制の状態に陥^{おちい}り掛かる。もう射撃をするにも、号令には依らずに、

ひと／＼、勝手に射撃する。平八郎は暫くそれを見てゐたが、重立つた人々を呼び集めて、「もう働きもこれまでぢや、好く今まで踏みこたへてゐてくれた、銘々此場を立ち退いて、然るべく処決せられい」と云ひ渡した。

集まつてゐた十二人は、格之助、白井、橋本、渡辺、瀬田、庄司、茨田いばらた、高橋、父柏かしはをか岡、西村、杉山と瀬田の若党植松とであつたが、平八郎の詞ことばを聞いて、皆顔を見合せて黙つてゐた。瀬田が進み出て、「我々はどこまでもお供をしますが、御趣意ごしゅいはなるべく一同に伝へることにしませう」と云つた。そして所々しょくに固まつてゐる身方みかたの残兵に首領しゅりやうの詞を伝達した。

それを聞いて悄然せうぜんと手持無沙汰に立ち去るものもある。待ち

構へたやうに持つてゐた鑓やり、負おつてゐた荷を棄てて、足早あしはやに逃げ
 げるものもある。大抵は此場を脱ぬけ出ることが出来たが、安田が
 一人逃げにんおくれて、町家まちやに潜伏したために捕へられた。此時同勢
 の中うちに長持ながもちの宰領さいりやうをして来た大工作兵衛がゐたが、首領の
 詞を伝達せられた時、自分だけではどこまでも大塩父ふし子の供がした
 いと云つて居残ゐのこつた。質しつぽく樸な職人氣質かたぎから平八郎が企くはだての私欲を
 離れた処に感心したので、強しひて与党に入れられた怨うらみを忘れて、
 生死を共にする氣になつたのである。

平八郎は格之助以下十二人と作兵衛とに取り巻かれて、淡路あはぢま
 町二丁目ちの西端から半丁程東へ引き返して、隣まで火の移つて
 ゐる北側の町家に踏み込んだ。そして北裏の東平野町ひがしひらのまちへ抜け

た。坂本等が梅田を打ち倒してから、四辻に出るまで、大ぶ時が立つたので、この上下十四人は首尾好く迹を晦あとくらますことが出来た。

此時北船場きたせんばの方角は、もう騒動が済んでから暫く立つたので、

焼けた家の址あとから青い煙が立ち昇つてゐるだけである。何物にか

執しふぢやく着して、黒く焦こげた柱、地に委ゆだねた瓦かはらのかけらの側そばを離れ

兼ねてゐるやうな人、獣けものの屍しかばねの腐る所に、鴉からすや野犬のいぬの寄るやうに、

何物をか捜さがし顔がほにうろついてゐる人などが、互たがひに顔を見合せぬや

うにして行き違ふだけで、平八郎等の立たち退のく邪魔をするものは

ない。八つ頃から空は次第に薄うすね鼠色ずみいろになつて来て、陰鬱いんうつな、

人の頭を押さへ附けるやうな気分が市中を支配してゐる。まだ鉄

砲や鑕やりを持つてゐる十四人は、詞ことばもなく、稻妻形いなづまがたに焼跡やけあとの町
 を縫ぬつて、影のやうに歩あゆみを運びつつ東横堀川ひがしよこぼりがはの西河岸にしかしへ出た。
 途中で道に沿うて建て並べた土蔵の一つが焼け崩れて、壁の裾すそだ
 け残つた中に、青い火がちよろ／＼と燃もえてゐるのを、平八郎が
 足を停とめて見て、懷ふところから巻物を出して焰ほのほの中に投げた。これは陰
 謀けきぶんの檄文と軍令状とを書いた裏へ、今年の正月八日から二月十
 五日までの間に、同盟者に記名調印させた連判状れんぱんじやうであつた。
 十四人はたつた今七八十人の同勢ひきを率ゐて渡つた高麗橋かうらいばしを、
 殆世ほとんどを隔てたやうな思おもひをして、同じ方向に渡つた。河岸かしに沿うて
 曲つて、天神橋てんじんばし詰づめを過ぎ、八軒屋に出たのは七つ時であつた。
 ふと見れば、栈橋さんばしに一艘さうの舟が繋つないであつた。船頭ともが一人、

方に蹲うづくまつてゐる。土地のものが火事なんぞの時、荷物を積んで逃げる、屋形やかたのやうな、余り大きくない舟である。平八郎は一行にめく目食はせをして、此舟に飛び乗のりこつた。跡あとから十三人がどやくと乗込んだ。

「こら。舟を出せ。」かう叫んだのは瀬田である。

不意を打たれた船頭は器械的に起たつて纜ともづなを解いた。

舟が中流に出てから、庄司は持つてゐた十文目筒もんめづゝ、其外の人々は手鑑てやりを水中に投げた。それから川風の寒いのに、皆着込きこみを脱ぬいで、これも水中に投げた。

「どつちへでも好いから漕こいでをれ。」瀬田はかう云つて、船頭に艀ろあやつを操らせた。火災に遭あつたものの荷物を運び出す舟が、大おほか

川にはばら蒔いたやうに浮かんでゐる。平八郎等の舟がそれに
 雜つて上つたり下だつたりしてゐても、誰も見咎めるものはない。
 併し器械的に働いてゐる船頭は、次第に醒覺して来て、どう
 にかして早くこの氣味の悪い客を上陸させてしまはうと思つた。

「旦那方どこへお上りなさいます。」

「黙つてをれ」と瀬田が叱つた。

平八郎は側にゐた高橋に何やらささやいだ。高橋は懷中から金
 を二両出して船頭の手握らせた。「いかい世話になるのう。お
 前の名はなんと云ふかい。」

「へえ。これは済みません。直吉と申します。」

これからは船頭が素直に指図を聞いた。平八郎は項垂れてゐた

頭かしらを挙げて、「これから拙者せつしやの所存しよぞんをお話いたすから、一同

聞いてくれられい」と云つた。所存と云ふのは大略かうである。

此度の企このたびくはだてはだてざんぞくざんぞくちゆうちゆう此度の企は残賊を誅して禍害くわがいを絶つと云ふ事と、私蓄しちくを発あば

いて陷溺かんできを救ふと云ふ事との二つを志こころざした者である。然しかるに彼かれ

は全く敗れ、此これは成るに垂なんくとして挫くじけた。主謀たる自分は天をも

怨うらまず、人をも尤とがめない。只ただ氣の毒に堪へぬのは、親戚故旧友人

徒弟たるお前方まへがたである。自分はお前方に罪を謝する。どうぞ此

同舟の会合を最後の団欒だんらんとして、袂たもとを分つて陸りくに上り、各潔おのづきよく

処決もろして貰もらひたい。自分等父子ふしは最早思もひ置くこともないが、跡あと

には女小供がある。橋本氏には大工作兵衛を連れて、いかにもし

て彼等の隠家かくれがへ行き、自裁じさいするやうに勧めて貰ふことを頼むと

云ふのである。平八郎の妾めかけ以下は、初め般若寺村の橋本方へ立ち退いて、それから伊丹の紙屋某方へ往つたのである。後に彼等が縛ばくに就いたのは京都であつたが、それは二人の妾が弓太郎を残しては死なれぬと云ふので、橋本が連れてさまよひ歩いた末である。

暮六つ頃から、天満橋北詰てんまばしきたづめの人の目に立たぬ所に舟を寄せて、先づ橋本と作兵衛とが上陸した。次いで父柏岡かしはをか、西村、茨田いたばら、高橋と瀬田に暇を貰つた植松うゑまつとの五人が上陸した。後に茨田は瀬田の妻子を落おとして遣つた上で自首し、父柏岡と高橋とも自首し、西村は江戸で願人坊主ぐわんにんばうずになつて、時疫じえきで死に、植松は京都で捕はれた。

あと
跡に残つた人々は土佐堀川から西横堀川に這入つて、新

築地きぢに上陸した。平八郎、格之助、瀬田、渡辺、庄司、白井、

杉山の七人である。人々は平八郎に迫つて所存しよぞんを問うたが、只

「いづれ免れぬ身ながら、少し考かんががある」とばかり云つて、打ち

明けない。そして白井と杉山とに、「お前方は心こころ残のこりのないや

うにして、身の始末を附けるが好い」と云つて、杉山には金五両

を渡した。

一行は暫く四つ橋の傍そばに立ち止まつてゐた。其時平八郎が「ど

こへ死し所しどころを求めに往くにしても、大小だいせうを挿さしてゐては人目

に掛かるから、一同刀を棄てるが好い」と云つて、先づ自分の刀

を橋の上から水中に投げた。格之助始はじめ、人々もこれに従つて刀を

投げて、皆脇わきぎし差ばかりになつた。それから平八郎の黙つて歩く
 跡あとに附いて、一同下寺町したでらまちまで出た。ここで白井と杉山とが、い
 つまで往つても名残なごりは尽きぬと云つて、暇いとまごひ乞をした。後に白
 井は杉山を連れて、河内国かはちのくに 渋川郡しぶかはごほり 大蓮寺村たいれんじむらの伯父の家に
 往き、鋏はさみを借りて杉山と俱ともに髪を剪そり、伏見へ出ようとする途中
 で捕はれた。

跡には平八郎父子と瀬田、渡辺、庄司との五人が残つた。その
 うち下寺町したでらまちで火事を見に出てゐた人の群を避けようとするはず
 みに、庄司が平八郎等四人にはぐれた。後に庄司は天王寺村てんわうじむらで
 夜よを明あかして、平野郷ひらのがうから河内かはち、大和やまとを経て、自分と前後して
 大和路やまとぢへ奔はしつた平八郎父子には出逢はず、大阪へ様子を見に帰る

氣になつて、奈良まで引き返して捕はれた。

庄司がはぐれて、平八郎父子と瀬田、渡辺との四人になつた時、下寺町の両側共寺ばかりの所を歩きながら、瀬田が重ねて平八郎に所存を問うた。平八郎は暫く黙つてゐて答へた。「いや先刻^{せんこく}考^{かんが}があるとは云つたが、別にかうと極^きまつた事ではない。お前方^{なかりゆき}二人は格別の間柄だから話して聞かせる。己^{おれ}は今暫く世の成行^{なりゆき}を見てゐようと思ふ。尤も間^{もつと}断^{かん}なく死ぬる覚悟をしてゐて、恥辱を受けるやうな事はせぬ」と云つたのである。これを聞いた瀬田と渡辺とは、「そんなら我々も是非共御先途^{ごせんと}を見届けます」と云つて、河内^{かはち}から大和路^{やまとぢ}へ奔^{はし}ることを父子^{ふし}に勧めた。四人の影は平野郷方角へ出る畑^{はたなかみち}中道^{やみ}の闇^{うち}の裏に消えた。

十、城

けふの騒動が^{はじめ}始て大阪の城^{じやうだい}代土井の耳に入^いつたのは、東町奉行跡部^{あとべ}が玉造^{たまつくりぐちぢやうばん}口定番^{こたんぱん}遠藤に加勢^こを請うた時の事である。

土井は遠藤を以て東西両町奉行に出馬を言ひ付けた。丁度西町奉行堀が遠藤の所に来てゐたので、堀自分はすぐに沙汰^{さた}を受け、それから東町奉行所に往つて、跡部に出馬の命を伝へることになつた。

土井は両町奉行に出馬を命じ、同時に目附中川半左衛門、犬塚太郎左衛門を陰謀の偵察、与党の逮捕に任じて置いて、昼四つ時^{とき}

に定番、大番、加番の面々を呼び集めた。

城代土井は下総古河の城主である。其下に居る定番二人

のうち、まだ着任しない京橋口定番米倉は武蔵金沢の城主で、

現に京橋口をも兼ね預かつてゐる玉造口定番遠藤は近江三上の城

主である。定番の下には一年交代の大番頭が二人ゐる。東大

番頭は三河新城の菅沼織部正定忠、西大番頭は河内狭

山の北条遠江守氏春である。以上は幕府の旗下で、定番の

下には各与力三十騎、同心百人がある。大番頭の下には各組

頭四人、組衆四十六人、与力十騎、同心二十人がある。京

橋組、玉造組、東西大番を通算すると、上下の人数が定番二百六

十四人、大番百六十二人、合計四百二十六人になる。これ丈では

守備が不足なので、幕府は外様とさまの大名に役知やくち一万石宛を遣つて加
 番ばんに取つてゐる。山里丸やまざとまるの一加番が越前大野の土井能登守利どるのとかみとした
 忠ただ、中小屋なかごやの二加番が越後与板よいたの井伊右京亮直経うきやうのすけなほつね、青屋
 口ぐちの三加番が出羽長瀬ではながとろの米津伊勢守政懿よねづいせのかみまさよし、雁木坂がんぎざかの四加
 番が播磨安志はりまあんじの小笠原信濃守長武しなのゝかみながたけである。加番は各物ものがしら頭
 五人、徒目付かちめつけ六人、平士九人、徒かち六人、小頭こがしら七人、足あしが
 輕る二百二十四人を率ひきゐて入城する。其内に小筒こづつ六十挺弓二十張はり
 がある。又棒突足輕ぼうつきあしがるが三十五人ゐる。四箇所の加番を積算す
 ると、上下の人数が千三十四人になる。定番以下の此人数に城代
 の家来を加へると、城内には千五六百人の士卒しやうがゐる。

定番、大番、加番の集まつた所で、土井は正九しやうつ時どきに城内を巡

見するから、それまでに各持口かくもちぐちを固めるやうにと言ひ付けた。

それから士分のものは鎧櫃よろひびつを担ぎ出す。具足奉行ぐそくぶぎやう上田五兵

衛は具足を分配する。鉄砲奉行いしわたひこだいふ石渡彦太夫は鉄砲玉薬てつぱうたまくすりを分

配する。鍋釜なべかまの這入はひつてゐた鎧櫃よろひびつもあつた位で、兵器装具には

用立たぬものが多く、城内は一方ひとかたならぬ混雑であつた。

九つ時になると、両大番頭おほばんがしらが先導になつて、土井は定ぢやうば

番ん、加番かばんの諸大名を連れて、城内を巡見した。門の数が三十三

箇所、番所の数が四十三箇所あるのだから、随分手間が取れる。

どこに往つて見ても、防備はまだ目も鼻も開いてゐない。土井は

暮六くれどきつ時に改めて巡見することにした。

二度目に巡見した時は、城内の士卒の外に、
尼崎あまがさき、岸和田きしわだ、

高槻、淀などから繰り出した兵が到着してゐる。

ひつじさるひら

坤に開いてゐる城の大手は土井の持口である。詰所は門内

の北にある。門前には柵を結び、竹束を立て、土俵を築き上げ

おほづゝ

て、大筒二門を据ゑ、別に予備筒二門が置いてある。門内には

ばんがしら

番頭が控へ、門外北側には小筒を持つた足輕百人が北向に陣

取つてゐる。南側には尼崎から来た松平遠江守忠栄の一番

とほたふみのかみたゞよし

手三百三十余人が西向に陣取る。略同数の二番手は後にここへ参

着して、京橋口に遷り、次いで跡部の要求によつて守口、吹田

うつ

あとべ

もりぐち

すゐた

へ往つた。後に郡山の一二番手も大手に加はつた。

こほりやま

大手門内を、城代の詰所を過ぎて北へ行くと、西の丸である。

西の丸の北、乾の角に京橋口が開いてゐる。此口の定番の詰所は

いぬあすみ

門内の東側にある。定番米津が着任してをらぬので、山里丸加番土井が守つてゐる。大筒の数は大手と同じである。門外には岸和田から来た岡部ないぜんのしやうながかず内膳正長和の一番手二百余人、高槻の永井ひだのかみなほとも飛騨守直与の手、其外淀の手が備へてゐる。

京橋口定番の詰所の東隣は焰硝蔵である。焰硝蔵と艮の角の青屋口との中間に、本丸に入る極楽橋ごくらくばしが掛かつてゐる。極楽橋から這入はひつた所が山里で、其南が天主閣、其又南が御殿である。本丸には菅沼、北条の両大番頭が備へてゐる。

青屋口には門の南側に加番の詰所がある。此門は加番米津が守つて、中小屋加番なかごやかばんの井伊が遊軍としてこれに加はつてゐる。青屋口加番の詰所から南へ順次に、中小屋加番、雁木坂加番がんぎざか、玉造

口定番の詰所が並んでゐる。雁木坂加番小笠原は、自分の詰所の前の雁木坂に馬^{うまじるし}印を立ててゐる。

玉造口^{ぢやうばん}定番の詰所は巽^{たつみ}に開いてゐる。玉造口の北側である。

此門は定番遠藤が守つてゐる。これに高櫓の手が加はり、後には郡^{こほりやま}山の三番手も同じ所に附けられた。玉造口と大手との間は、東が東大番、西が西大番の平常の詰所である。

土井の二度の巡見の外、中川、犬塚の両目附は城内^{しよく}所々を廻つて警戒し、又両町奉行所に向いて情報を取つた。夜^よに入つてからは、城の内外の持口^{もちぐち}々々に篝火^{かざりび}を焚^たき連ねて、炎^{えん}焰^く天^{てん}を焦^{こが}すのであつた。跡部の役宅^{やくたく}には伏見奉行^{まがりぶちかひのかみけいざん}加納遠江守久^{かなふとほたふみのかみひさ}、堀の役宅には堺奉行^{さかい}曲淵甲斐守景山^{まがりぶちかひのかみけいざん}が、各与力同心

を率ゐて繰り込んだ。又天王寺方面には岸和田から来た二番手千四百余人が陣を張った。

目附中川、犬塚の手で陰謀の与党を逮捕しようと云ふ手配は、

日暮頃から始まったが、はか／＼しい働きも出来なかつた。吹

ゐたむら

うぢがみ

田村で氏神の神主をしてゐる、平八郎の叔父宮脇志摩の所へ

とりて

捕手の向つたのは翌二十日で、宮脇は切腹して溜池に飛び込ん

ためいけ

だ。船手奉行の手で、川口の舟を調べはじめたのは、中一日置い

ふなて

た二十一日の晩からである。城の兵備を撤したのも二十一日であ

てつ

る。

朝五つ時に天満から始まつた火事は、大塩の同勢が到る処に大

てんま

筒を打ち掛け火を放つたので、風の余り無い日でありながら、思

おもひ

の外^{ほか}にひろがつた。天満は東が川崎、西が知源寺^{ちげんじ}、摂津国町^{つのくにまち}、又
 二^{たじろうまち}郎町、越後町^{はたごまち}、旅籠町^{はたごまち}、南が大川、北が与力町^{さかひ}を界とし、
 大手前から船場^{せんば}へ掛けての市街は、谷町^{たにまち}一丁目から三丁目まで
 を東^{ひがし}界^{さかひ}、上^{かみ}大^{おほ}みそ筋から下^{しも}難波橋筋^{なんばばし}までを西^{にし}界^{さかひ}、内^{うち}
 本町^{ほんまち}、太郎左衛門町^{たろうざゑもんまち}、西入町^{にしいるまち}、豊後町^{ぶんごまち}、安土町^{あづちまち}、魚屋
 町^ちを南^{みなみ}界^{さかひ}、大川、土佐堀川を北界^{きたさかひ}として、一面の焦土とな
 った。本町橋^{ほんまちばし}東詰で、西町奉行堀に分れて入城した東町奉行跡
 部^もは、火が大手近く燃えて来たので、夕七^{ゆふ}七時に又坂本以下の与
 力同心を率ゐて火事場に出馬した。丁度^{ひげしにんそく}火消人足が谷町で火を
 食ひ止めようとしてゐる所であつたが、人数が少いのと一同疲れ
 てゐるのとのために、暮^{くれ}六^{はん}つ半に谷町代官所に火の移るのを防ぐ

ことが出来なかつた。鎮火したのは翌二十日の宵よひ五つ半である。
 町数まちかずで言へば天満組四十二町、北組五十九町、南組十一町、家
 数へかず、竈数かまどかずで言へば、三千三百八十九軒、一万二千五百七十
 八戸わざはひかゝが災に罹つたのである。

十一、二月十九日の後の一、信貴越

大阪兵燹へいせんの余焰よえんが城内の篝火かがりびと共に闇を照し、番場ばんばの原には
 避難した病人産婦の呻吟しんぎんを聞く二月十九日の夜、平野郷ひらのがうのと
 ある森蔭もりかげに体を寄せ合つて寒さを凌しのいでゐる四人があつた。こ
 れは夜よの明けぬ間あに河内まへ越さうとして、身も心も疲れ果て、最も

早^{はや}一步も進むことの出来なくなつた平八郎父子と瀬田、渡辺とである。

四人は翌二十日に河内^{かはち}の界^{さかひ}に入つて、食を求める外には人家に立ち寄らぬやうに心掛け、平野川に沿うて、間道^{かんだう}を東へ急いだ。さて途中どこで夜を明かさうかと思つてゐるうち、夜なかから大風雨になつた。やうく産土^{うぶすな}の社^{やしろ}を見付けて駈^かけ込んでゐると、暫く物を案じてゐた渡辺が、突然もう此先きは歩けさうにないから、先生の手足纏^{てあしまとひ}にならぬやうにすると云つて、手早く脇差^{わきざし}を抜いて腹に突き立てた。左の脇腹に三寸余り切先^{きつさき}が這入^{はひ}つたので、所詮^{しよせん}助^{みきは}からぬと見極めて、平八郎が介錯^{かいしやく}した。渡辺は色の白い、少し齒の出た、温順篤実な男で、年齢は僅^{わづか}に四十を

越したばかりであつた。

二十一日の暁あかつきになつても、大風雨は止みさうな気色けしきもない。平

八郎父子ふしと瀬田とは、渡辺の死骸しがいを跡あとに残して、産土うぶすなの社やしろを出

た。土地の百姓が死骸を見出して訴うへたのは、二十二日の事であ

つた。社のあつた所は河内国かはちのくに志紀郡しきごほり田井中村たゐなかむらである。

三人は風雨を冒をかして、間道を東北の方向に進んだ。風雨はやう

く午頃ひるごろに息やんだが、肌まで濡ぬれ通とほつて、寒さは身しに染しみる。

辛からうじて大和川やまとがはの支流幾つかを渡つて、夜よに入つて高安郡たかやすごほり

恩地村おんちむらに着いた。さて例の通人家とほりを避けて、藪陰やぶかげの辻堂を搜

し当てた。近辺から枯枝かれえだを集めて来て、おそろく焚火たきびをして

ゐると、瀬田が発熱ほつねつして来た。いつも血色の悪い、蒼白あをしろい顔

が、大酒たいしゅをしたやうに暗赤色あんせきしよくになつて、持前の二皮目ふたかはめが
 血走ちばしつてゐる。平八郎父子が物を言ひ掛けければ、驚いたやうに返
 事をするが、其間あひだく々々うづくまは焚火の前に蹲うづくまつて、現うつゝとも夢ゆめとも分か
 らなくなつてゐる。ここまで来る途中で、先生が寒からうと云つ
 て、瀬田は自分の着てゐた羽織ぬを脱いで平八郎に襲かねさせたので、
 誰よりも強く寒さに侵をかされたものだらう。平八郎は瀬田に、兎とに
 角人家かくに立ち寄つて保養して跡から来るが好いと云つて、無理に
 田圃道たんぼみちを百姓家のある方へ往かせた。其後うしろかげ影を暫く見送つ
 てゐた平八郎は、急に身を起して焚火を踏み消した。そして信貴しぎ
 越こえの方角こうろぎを志して、格之助と一しよに、又間道かんだうを歩き出した。
 瀬田は頭がぼんやりして、体からだぢゆうの脈つづみが鼓を打つやうに耳に

響く。狭い田の畔道くろみちを踏んで行くに、足がどこを踏んでゐるか
感じが無い。動やもすれば苳株きりかぶの間の湿しめつた泥に足を踏ふみ込む。
やうく一軒の百姓家の戸の隙すきから明かりのさしてゐるのにたど
り着いて、瀬田ははつきりとした声で、暫しばらく休息させて貰もらひたい
と云つた。雨戸を開けて顔を出したのは、四角な赭あから顔の爺ぢいさ
んである。瀬田の様子をぢつと見てゐたが、思おもひの外拒ほかまうともせ
ずに、圕あろり炉裏そばの側に寄つて休めと云つた。婆ばあさんが草鞋わらぢを脱ぬが
せて、足を洗つてくれた。瀬田は火の側そばに横になるや否いなや、目を
閉ぢてすぐに鼾いびきをかき出した。其時爺いさんはそつと瀬田の顔に
手を当てた。瀬田は知らずにゐた。爺いさんはその手を瀬田の腰
の所に持つて往つて、脇差わきざしを抜き取つた。そしてそれを持つて、

家を駈け出した。行灯あんどうの下にすわつた婆あさんは、呆あきれて夫の跡あとを見送つた。

瀬田は夢を見てゐる。松並木のどこまでも続いてゐる街道を、自分ちからは力限ちからかぎり駈けて行く。跡あとから大勢おほぜいの人が追ひ掛けて来る。自分の身は非常に軽くて、殆ほとんど鳥の飛ぶやうに駈けることが出来る。それに追ふものの足音が少しも遠ざからない。瀬田は自分の足の早いすこぶるのに頗満足して、只追たゞふものの足音の同じやうに近く聞えるのを不審に思つてゐる。足音は急きん調てうに鼓を打つつゞ様に聞える。ふと気が附いて見ると、足音と思つたのは、自分の脈の響くのであつた。意識が次第に明瞭になると共に、瀬田は腰の物の亡なくなつたのを知つた。そしてそれと同時に自分の境遇を不思議な程てきか的

確^くに判断することが出来た。

瀬田は跳^はね起^おきた。眩^{めまひ}暈^{おこ}の起^{おこ}りさうなのを、出来るだけ意志を緊張してこらへた。そして前に爺^ぢいさんの出て行つた口から、同じやうに駈^かけ出した。行^{あんどう}灯^{もと}の下^ばの婆^{あき}あさんは、又呆^{あき}れてそれを見送^{みおく}つた。

百姓家の裏に出て見ると、小道を隔^へてて孟^{まう}宗^{そう}竹^{ちく}の大^{おほ}藪^{やぶ}がある。その奥^{おく}を透^すかして見ると、高低種々の枝を出してゐる松の木がある。瀬田は堆^{うづたか}く積^つもつた竹の葉を踏^ふんで、松の下に往^{ふところ}つて懷^わを探^{たづ}つた。懷^{こころ}には偶然捕^{とり}縄^{なは}があつた。それを出してほぐして、低い枝に足を踏^ふみ締^しめて、高い枝に投げ掛^かけた。そして罫^{わな}を作^{つく}つて自分の頸^{くび}に掛^かけて、低い枝から飛び降りた。瀬田は二十五歳で、

脇差を盗まれたために、見苦しい最期を遂げた。村役人を連れて帰つた爺いさんが、其夜のうちに死骸を見付けて、二十二日に領主稲葉丹後守に届けた。

平八郎は格之助の遅れ勝になるのを叱り励まして、二十二日の午後に大和の境に入つた。それから日暮に南畑で格之助に色々な物を買はせて、身なりを整へて、駄のはづれにある寺に這入つた。暫くすると出て来て、「お前も頭を剃るのだ」と云つた。格之助は別に驚きもせず、連れられて這入つた。親子が僧形になつて、麻の衣を着て寺を出たのは、二十三日の明六つ頃であつた。

寺にゐた間は平八郎が殆ど一言も物を言はなかつた。さて寺を出

離れると、平八郎が突然云つた。「さあ、これから大阪に帰るのだ。」

格之助も此詞このとばには驚いた。「でも帰りましたら。」

「好いから黙つて附いて来い。」

平八郎は足の裏が燃えるやうに逃げて来た道を、渴かつしたものが泉を求めて走るやうに引き返して行く。傍はたから見れば、その大阪へ帰らうとする念は、一種の不可抗力のやうに平八郎の上に加はつてゐるらしい。格之助も寺で宵よひと暁あかつきとに温あたい粥かかゆを振舞ふるまはれてからは、靈藥れいやくを服したやうに元氣を恢復して、もう遅れるやうな事はない。併しかし一步步危険な境に向つて進むのだと云ふ考かんがが念頭を去らぬので、先に立つて行く養父の背を望んで、驚異の情の

次第に加はるのを禁ずることが出来ない。

十二、二月十九日後の二、美吉屋

大阪油懸町あぶらかけまちの、紀伊国橋きのくにばしを南へ渡つて東へ入る南側で、東から二軒目に美吉屋みよしやと云ふ手拭地てぬぐひぢの為入屋しいれやがある。主人五郎兵衛は六十二歳、妻つねは五十歳になつて、娘かつ、孫娘かくほかの外ほか、家内かないに下男五人げなん、下女一人げぢよを使つてゐる。上下十人暮しである。五郎兵衛は年来大塩家に出入して、勝手向かつてむきの用を達たしたこともあるので、二月十九日に暴動のあつた後は、町奉行所の沙汰さたで町ちあづけ預ちあづけになつてゐる。

此美吉屋みよしやで二月二十四日の晩に、いつものやうに主人が勝手に

寝て、家族や奉公人を二階と台所とに寝させてゐると、宵よひの五つ

過に表の門をた敲くものがある。主人が起きて誰たれだと問へば、備びぜん

前島町しまち河内屋八五郎かはちやの使つかひだと云ふ。河内屋は兼かねて取とり引ひきをして

ゐる家なので、どんな用事があつて、夜よに入いつて人をよこしたか

と訝いぶかりながら、庭へ降りて潜くぐり戸を開けた。

戸があくとすぐに、衣の上に鼠ねずみ色いろの木綿合羽もめんかつばをはおつた僧

侶が二人つと這入はひつて、低い声に力を入れて、早くその戸を締しめ

ろと指図した。驚きながら見れば、二人共僧そうぎやう形ふにに不ふ似にあひ合わな脇

差さを左の手に持つてゐる。五郎兵衛はがたく震えて、返事も

せず、身動きもしない。先に這入つた年上の僧が目食めくはせをする

と、跡あとから這入つた若い僧が五郎兵衛を押し除のけて戸締とじまりをした。二人は縁えんに腰を掛けて、草鞋わらぢの紐ひもを解とき始めた。五郎兵衛はそれを見てゐるうちに、再び驚いた。髪かみをおろして相好さうがうは變つてゐても、大塩親子だと分かつたからである。「や。大塩様ではございませんか。」「名なんぞを言ふな」と、平八郎が叱るやうに云つた。

二人は黙つて奥へ通るので、五郎兵衛は先に立つて、納戸なんどの部屋に案内した。五郎兵衛が、「どうなさる思おほしめし召めしか」と問ふと、平八郎は只ただ「当分厄介になる」とだけ云つた。

陰謀の首領をかくまふと云ふことが、容易ならぬ罪になるとは、五郎兵衛もすぐに思つた。併しかし平八郎の言ふことは、年来暗示あんじの

やうに此爺ぢいさんの心の上に働く習慣になつてゐるので、ことわることは所詮しよせん出来ない。其上親子が放さずに持つてゐる脇差も、それとなく威嚇ゐかくの功を奏してゐる。五郎兵衛は只二人を留めて置いて、若もし人に知られるなら、それが一刻も遅く、一日も遅いやうにと、禍殃くわあうを未来に推し遣おするより外ない。そこで小部屋の襖ふすまをぴつたり締め切つて、女房にだけわけを話し、奉公人に知らせぬやうに、食事を調ととのへて運ぶことにした。

一日立つ。二日立つ。いつは立ち退たのいてくれるかと、老人夫婦は客の様子を覗うかがつてゐるが、平八郎は落ち着き払つてゐる。心こころ安やすい人が来ては奥の間へ通ることもあるので、襖ふすま一重の先にお尋たづねものを置くのが心配に堪へない。幸さいはひみよしやひつじさるに美吉屋の家には、坤

の隅すみに離座敷はなれざしきがある。周囲まはりは小庭こにはになつてゐて、母屋おもやとの間に
 は、小さい戸口の附いた板塀いたべいがある。それから今一つすぐに往
 来に出られる口が、表口から西に当る路次ろじに附いてゐる。此離座
 敷なら家族も出入せぬから、奉公人に知られる虞おそれもない。そこで
 五郎兵衛は平八郎父子を夜中にそこへ移した。そして日々にち／＼飯はんま
 米いを測はかつて勝手へ出す時、紙袋かみぶくろに取り分け、味噌みそ、塩しほ、香かう
 の物ものなどを添へて、五郎兵衛が手づから持ち運んだ。それを親子
 炭火すみびで自炊じすゐするのである。

兎角とかくするうちに三月になつて、美吉屋みよしやにも奉公人の出代でかはりがあ
 った。その時女中の一人が平野郷ひらのがうの宿元やどもとに帰つてこんな話を
 した。美吉屋では不思議に米が多くいる。老人夫婦が毎日米を取

り分けて置くのを、奉公人は神様に供へるのだらうと云つてゐるが、それにしてもおさがりが少しも無いと云ふのである。

平野郷は城代土井の領分八万石の内一万石の土地で、七名家と云ふ土着のものが支配してゐる。其中の末吉平左衛門、中瀬九郎兵衛の二人が、美吉屋から歸つた女中の話を聞いて、郷の陣屋に訴へた。陣屋に詰めてゐる家来が土井に上申した。土井が立入与力内山彦次郎に美吉屋五郎兵衛を取り調べることを命じた。立入与力と云ふのは、東西両町奉行の組のうちから城代の許へ出して用を聞せる与力である。五郎兵衛は内山に糺問せられて、すぐに実を告げた。

土井は大目附時田肇に、岡野小右衛門、菊地鉄平、芹沢啓

次郎、松まつ高たか縫ぬい藏ざう、安立あだち讃さん太郎たらう、遠とほ山やま勇ゆう之助しうご、斎藤しやうど正五しやうご郎らう、菊地きくち弥六やろくの八人を附けて、これに逮捕を命じた。

三月二十六日の夜よ四よつ半はん時とき、時田は自宅に八人のものを呼んで命を伝へ、すぐに支度したくをして中屋敷に集合させた。中屋敷では、時田が美吉屋の家宅の模様を書いたものを一同に見せ、なるべく二人を生擒いけどりにするやうにと云ふ城代の注文を告げた。岡野某は相談して、時田から半棒はんぼうを受け取った。それから岡野が入口の狭い所を進むには、順番を籤くじで極きめて、争論のないやうにしたいと云ふと、一同これに同意した。岡野は重ねて、自分は齡よ五十歳はひを過ぎて、跡取あととりの倅せがれもあり、此度の事を奉公のしをさめにしたいから、一番を譲つて貰もらつて、次の二番から八番までの籤くじを人々

に引かせたいと云つた。これにも一同が同意したので、籤を引いて二番菊地弥六、三番松高、四番菊地鉄平、五番遠山、六番安立、七番芹沢、八番斎藤と極めた。

二十七日の暁^{あけ}八時^{じき}過、土井の家老^{たかみ}鷹見十郎左衛門は岡野、菊

地鉄平、芹沢の三人を宅に呼んで、西組与力内山を引き合せ、内

山と同心四人とに部屋目附^{へやめつけ}鳥巢彦四郎を添^{とす}へて、偵察に遣^やること

を告げた。岡野等三人は中屋敷に歸つて、一同に鷹見^{たかみ}の処置を話

して、偵察の結果を待つてゐると、鷹見が出向いて来て、大切の

役目だから、手落のないやうにせいと云ふ訓示をした。七つ半過

に鳥巢^{とす}が中屋敷^{なかやしき}に来て、内山の口上を伝へて、本町^{ほんまち}五丁目の

くわいしよ

会^{とす}所へ案内した。時田以下の九人は鳥巢^{とす}を先に立てゝ、外に

岡村桂蔵と云ふものを連れて本町へ往つた。しばらく暫く本町の会所に待つてゐると、内山の使に同心が一人来て、一同を信濃町の会所に案内した。あぶらかけまち油懸町の南裏みなみうらどほり通である。しなのまち信濃町では、一同が内山の出した美吉屋の家の図面を見て、その意見に従つて、ひがしおもてぐち東表口おつてに向ふ追手と、にしうらぐち西裏口からめてに向ふ搦手とに分れることになつた。

おつて追手は内山、同心二人、岡野、菊地弥六、松高、菊地鉄平の七人、からめて搦手は同心二人、遠山、あだち安立、せりぎは芹沢、齋藤、時田の七人である。此二手は総年寄今井官之助、ひだこでんじ比田小伝次、ながせ永瀬七三郎三人の率ゐた火消人足ひけしにんそくに前まへもつ以て取り巻かせてある美吉屋へ、六つ半時に出向いた。からめて搦手は一步先に進んで西裏口を固めた。追お

手は續いて岡野、菊地弥六、松高、菊地鉄平、内山の順序に東表口を這入った。内山は菊地鉄平に表口の内側に居残つてくれと頼んだ。鉄平は一人では心こころもと元ないので、附いて来た岡村に一しよにゐて貰った。

追手の同心一人は美吉屋の女房つねを呼び出して、耳に口を寄せて云った。「お前大切の御用だから、しつかりして勤めんではならぬぞ。お前は板いた堀ほりの戸口へ往つて、平八郎にかう云ふのだ。内の五郎兵衛はお預あづかけになつてゐるので、今家財改かざいあらためのお役人が来られた。どうぞちよいとの間裏うらの路次口ろじぐちから外へ出てゐて下さいと云ふのだ。間違へてはならぬぞ」と云った。

つねは顔色が真まつ蒼さになつたが、やうく先に立つて板堀の戸

口に往つて、もしくと声を掛けた。併し教へられた口上を言ふことは出来なかつた。

暫くすると戸口が細目に開いた。内から覗いたのは坊主頭の

平八郎である。平八郎は捕手と顔を見合せて、すぐに戸を閉ぢた。

岡野等は戸を打ちこはした。そして戸口から岡野が呼び掛けた。

「平八郎卑怯だ。これへ出い。」

「待て」と、平八郎が離座敷の雨戸の内から叫んだ。

岡野等は暫くためらつてゐた。

おもてぐち

表 口の内側にゐた菊地鉄平は、美吉屋の女房小供や奉公人

の立ち退いた跡で暫く待つてゐたが、板塀の戸口で手間の取れ

る様子を見て、鍵形になつてゐる表の庭を、縁側の角に附いて

廻つて、戸口にゐる同心に、「もう踏み込んではどうだらう」と云つた。

「宜^{よろ}しうございませう」と同心が答へた。

鉄平は戸口をつと這^は入つて、正面にある離座敷^{はなれざしき}の雨戸を半^{はん}棒^{ぼう}で敲^{たた}きこはした。戸の破れた所からは烟が出て、火薬の臭^{にお}がした。

鉄平に続いて、同心、岡野、菊地弥六、松高が一しよに踏み込んで、残る雨戸を打ちこはした。

離座敷の正面には格之助の死骸らしいものが倒れてゐて、それに衣類^{おほ}を覆^{おほ}ひ、間内^{まうち}の障子をはづして、死骸の上を越させて、雨戸に立て掛け、それに火を附けてあつた。雨戸がこはれると、火

の附いた障子が、燃えながら庭へ落ちた。死骸らしい物のある奥の壁際かべぎはに、平八郎は鞆さやを払った脇差わきざしを持つて立つてゐたが、踏み込んだ捕手とりてを見て、其刃やいばを横に吭のどに突き立て、引き抜いて捕手の方へ投げた。

投げた脇差は、傍輩はうばいと一しよに半棒で火を払ひ除のけてゐる菊地弥六の頭を越し、襟えりから袖をかすつて、半棒に触れ、少し切り込んでけし飛んだ。弥六の襟、袖、手首には、灑そぎ掛けたやうに血が附いた。

火は次第に燃えひろがつた。捕手は皆焰ほのほを避けて、板塀の戸口から表庭おもてにはへ出た。

弥六は脇差を投げ附けられたことを鉄平に話した。鉄平が「そ

んなら庭にあるだらう」と云つて、弥六を連れて戸口に往つて見ると、四五尺ばかり先に脇差は落ちてゐる。併し火が強くて取りに往くことが出来ない。そこへ最初案内に立つた同心が来て、

「わたくし共の木刀には鰐つばがありますから、引つ掛けて掻かき寄せませう」と云つた。脇差は旨うまく掻き寄せられた。柄つかは茶糸巻ちやいとまきで、刃はが一尺八寸あつた。

搦手からめては一步先に西裏口にしうらぐちに来て、遠山、安立、芹沢、時田が

東側に、斎藤と同心二人とが西側に並んで、真ま中なかに道を開あけ、逃げ出したら挟はさみうち撃うちにしようと待つてゐた。そのうち余り手間てま

取るので、安立、遠山、斎藤の三人が覗のぞきに這入つた。離座敷には人声がしてゐる。又持場もちばに歸つて暫く待つたが、誰も出て来な

い。三人が又覗のぞきに這入ると、雨戸の隙から火焰の中に立つてゐる平八郎の坊主頭が見えた。そこで時田、芹沢と同心二人とを促して、一しよに半棒で雨戸を打ちこはした。併しかし火氣さかんが熾さかんなので、此手のものも這入ることが出来なかつた。

そこへ内山が来て、「もう跡あとは火を消せば好いのですから、消せ防方うぼうに任せてはいかがでせう」と云つた。

遠山が云つた。「いや。死骸がぢき手近にありますから、どうかしてあれを引き出すことにしませう。」

遠山はかう云つて、傍はうばい輩と一しよに死骸のある所へ水を打ち掛けてゐると、消防方せうぼうかたが段々集つて来て、朝五つ過に火を消し止めた。

総年寄そうどしより今井が火消人足ひけしにんそくを指揮して、焼けた材木を取り除のけ

させた。其下から吉兵衛と云ふ人足が先まづ格之助らしい死骸を引

き出した。胸が刺さし貫つらぬいてある。平生齒が出てゐたが、其齒を剥む

き出してゐる。次に平八郎らしい死骸が出た。これは吭のどを突いて

俯伏うつぶしてゐる。今井は二つの死骸を水で洗はせた。平八郎の首は

焼けふくらんで、肩に埋うづまつたやうになつてゐるのを、頭を抱へ

て引き上げて、面めんてい体を見定めた。格之助は創きずの様子で、父の手

に掛かつて死んだものと察せられた。今井は近所の三宅みやけといふ医

者の家から、駕籠かごを二挺出ちやうさせて、それに死骸を載せた。

二つの死骸は美吉屋夫婦と共に高たかはらたまり原溜へ送られた。道筋に

は見物人の山を築きづいた。

十三、二月十九日後の三、評定

大塩平八郎が陰謀事件の評定^{ひやうちやう}は、六月七日に江戸の評定^{ひやうち}所に命ぜられた。大岡紀伊守忠愛^{きいのかみたぢか}の預つてゐた平山助次^{やそ}郎、大阪から護送して来た吉見九郎右衛門、同英太郎、河合八十^{おなじく}次郎^{じらう}、大井正一郎、安田図書^{やすだづしよ}、大西与五郎^{よごらう}、美吉屋五郎兵衛^{みよしや おなじく}、同つね、其外^{そのほか}西村利三郎を連れて伊勢から仙台に往き、江戸で利三郎が病死するまで世話をした黄檗^{わうばく}の僧剛嶽^{かうがく}、江戸で西村を弟子にした橋本町一丁目の願人^{ぐわんにん}冷月^{れいげつ}、西村の死骸^{はうむ}を葬つた浅草遍照院^{へんせうゐん}の所化堯^{しよけい}周等^{しうしう}が呼び出されて、七月十六日から取^と

りしらべ

調が始まつた。次いで役人が大阪へも出張して、両方で取り調べた。罪案が定まつて上申せられたのは天保九年閏四月八日で、宣告のあつたのは八月二十一日である。

平八郎、格之助、渡辺、瀬田、小泉、庄司、近藤、大井、深尾、茨田、高橋、父柏岡、倅柏岡、西村、宮脇、橋本、白井孝右

いばらだ

かしはをか

衛門と暴動には加はらぬが連判をしてゐた摂津森小路村の医師

せつ、もりこうぢむら

横山文哉、同国猪飼野村の百姓木村司馬之助との十九人、それ

ぶんさい

あかひのむら

しまのすけ

から返忠をし掛けて遅疑した弓奉行組同心小頭竹

かへりちゆう

ちぎ

ゆみぶぎやうぐみ

どうしんこがしらたけが

上万太郎は磔になつた。然るに九月十八日に鳶田で刑の執行が

み はりつけ

しか

とびた

あつた時、生きてゐたのは竹上一人である。他の十九人は、自殺した平八郎、渡辺、瀬田、近藤、深尾、宮脇、病死した西村、人

にん

た

に殺された格之助、小泉を除き、彼江戸へ廻された大井迄悉く牢死したので、磔柱には塩詰の死骸を懸けた。中にも平八郎父子は焼けた死骸を塩詰にして懸けられたのである。西村は死骸が腐つてゐたので、墓を毀たれた。

松本、堀井、杉山、曾我、植松、大工作兵衛、獵師金助、美

吉屋五郎兵衛、瀬田の中間浅佶、深尾の募集に応じた尊

延寺村の百姓忠右衛門と無宿新右衛門とは獄門、暴動に加

はらぬ与党の内、上田、白井孝右衛門の甥儀次郎、般若寺村の

百姓卯兵衛は死罪、平八郎の妾ゆう、美吉屋の女房つね、大西与

五郎と白井孝右衛門の倅で、穉い時大塩の塾にゐたこともあり、

父の陰謀の情を知つてゐた彦右衛門とは遠島、安田と杉山を剗

髪させた同人どうにんの伯父、河内大蓮寺かはちたいれんじの僧正しやうほう方、西村の逃亡を助けた同人の姉婿あねむこ、堺の医師寛輔くわんぽの二人にんとは追放になった。併しかし此人々も杉山、上田、大西、倅白井の四人の外は、皆刑の執行前に牢死した。

密訴みつそをした平山と父吉見とは取高とりだかの儘ま、譜代ふだい席小普請入せきこぶしんいりになり、吉見英太郎、河合八十次郎やそじらうおのくは各銀五十枚を賜たまはつた。此中このうちで酒井大和守忠嗣やまとのかみたゞつぐへ預替あづけがへになつてゐた平山は、番人の便所に立つた留守に詰所つめしよの棚の刀箱かたなばこから脇差を取り出して自殺した。

城代土井以下賞与を受けたものは十九人あつた。中にも坂本鉉げのすけんは鉄砲方てつぽうかたになつて、目見めみえい以上じやうの末席ばつせきに進められた。

併し両町奉行には賞与がなかつた。

附録

私が大塩平八郎の事を調べて見ようと思ひ立つたのは、鈴木本
 次郎君に一冊の写本を借りて見た時からの事である。写本は墨すみ
 付き二十七枚の美濃紙本で、表紙に「大阪大塩平八郎万記録」
 と題してある。表紙の右肩には「川辺文庫」の印がある。川辺かはのべ
 御楯君が鈴木君に贈与したものださうである。

万記録の内容は、松平遠江守とほたふみのかみの家来稲垣左近右衛門さこんゑもんと
 云ふ者が、見聞した事を数度に主家へ注進した文書である。松平

遠江守とは摂津^{せつ}尼崎の城主松平忠^{ただな}栄の事であらう。

万記録は所謂^{いはゆる}風説が大部分を占めてゐるので、其中から史実^{えん}を選び出さうとして見ると、獲ものは頗^{すこぶ}乏しい。併^{しか}し記事が穴だらけなだけに、私はそれに空想を刺戟^{しげき}せられた。

そこで現に公にせられてゐる、大塩に關した書籍の中で、一番多くの史料を使つて、一番精^{くは}しく書いてある幸田^{かうだしげ}成友君の「大塩平八郎」を読み、同君の新小説に出した同題の記事を読んだ。そして古い大阪の地図や、「大阪城志」を参考して、伝へられた事実を時間と空間との経緯に配列して見た。

こんな事をしてゐる間、私の頭の中を稍^{やゝ}久しく大塩平八郎と云ふ人物が占領してゐた。私は友人に逢^たふ度に、平八郎の話をし出

して、これに関係した史料や史論を聞かうとした。松岡寿君

は平八郎の塾にゐた宇津木矩之允と岡田良之進との事に就いて、

在来の記録に無い事実を聞かせてくれ、又三上参次君、松本亦

太郎君は多少纏つた評論を聞せてくれた。

そのうち私の旧主人が建ててゐる菁々塾の創立記念会があつた。

私は講話を頼まれて、外に何も考へてゐなかつたため、大塩平八郎を題とした二時間ばかりの話をした。

そしてとうとう平八郎の事に就いて何か書かうと云ふ氣になつた。

私は無遠慮に「大塩平八郎」と題した一篇を書いた。それは中

央公論に載せられた。

平八郎の暴動は天保八年二月十九日である。私は史実に推測を加へて、此二月十九日と云ふ一日の間の出来事を書いたのである。史実として時刻の考へられるものは、概ね左の通である。おほむ

天保八年二月十九日

今の時刻 昔の時刻 事実

午前四時 暁七時（寅） 吉見英太郎、河合八十次郎の二少年吉見の父九郎右衛門の告発書を大阪西町奉行堀利堅ほりとしかたに呈す。

六時 明六時（卯） 東町奉行跡部良弼あとべよしすけは代官二人に防備を命

じ、大塩平八郎の母兄大西与五郎に平八郎を訪とひて処決せしむることを囑しよくす。

七時 朝五時（辰） 平八郎家宅に放火して事を挙げ。

十時 昼四時（巳） 跡部坂本鉉之助げんのすけに東町奉行所の防備を命

ず。

十一時 昼四半時 城代土井利位どろとしつら城内の防備を命ず。

十二時 昼九時（午） 平八郎の隊北浜に至る。土井初めて城内を巡視す。

午後四時 夕七時（申） 平八郎等八軒屋に至りて船に上る。

六時 暮六時（酉） 平八郎に附随せる与党の一部上陸す。土井再び城内を巡視す。

時刻の知れてゐるこれだけの事実の前後と中間とに、伝へられてゐる一日間の一切の事実を盛り込んで、矛盾が生じなければ、

それで一切の事実が正確だと云ふことは証明せられぬまでも、記載の信用は可なり高まるわけである。私は敢てそれあへを試みた。そして其間に推測をたくまし違なくしたには相違ないが、余り暴力的な切盛きりもりや、人を馬鹿にした捏造ねつぞうはしなかつた。

私の「大塩平八郎」は一日間の事を書くを主としてはゐたのだが、其一日の間に活動してゐる平八郎と周囲の人物とは、皆それぞれの過去を持つてゐる。記憶を持つてゐる。殊ことに外生活だけを臚列ろれつするに甘んじないで、幾分か内生活に立ち入つて書くことになる、過去の記憶は比較的大きい影響を其人々の上に加へなくてはならない。さう云ふ場合を書く時、一目に見わたしの付くや

うに、私は平八郎の年譜を作った。原稿には次第に種々な事を書き入れたので、たぐいさ些の空白をも残さぬばかりでなく、文字と文字とが重なり合つて、他人が見てはなんの反古ほごだか分からぬやうになつた。ここにはそれを省略して載せる。

大塩平八郎年譜

寛政五年癸丑（一七九三年） 大塩平八郎後素生る。幼名文之

助。祖先は今川氏の族にして、波右衛門と云ふ。今川

氏滅びて後、岡崎の徳川家康に仕ふ。小田原役に足立

勘平を討ちて弓を賜はる。伊豆塚本に采地さいちを授けらる。

大阪陣の時、越後柏崎の城を守る。後尾張侯に仕へ、

嫡子をして家を襲^つがしむ。名古屋白壁町の大塩氏は其後なり。波右衛門の末子^{ぼつし}大阪に入り、町奉行組与力となる。天満橋筋長柄町東入四軒屋敷に住す。数世にして喜内と云ふものあり。其弟を助左衛門、其子を政之丞成余と云ふ。成余の子を平八郎敬高と云ふ。敬高の弟志摩出でて宮脇氏^{をか}を冒す。敬高大西氏^{めと}を娶る。文之助を生む。名は後素。^{あさな}字は子起。通称は平八郎。中齋と号す。居る所を洗心洞と云ふ。其親族関係左の如し。

(幸田)

某——忠兵衛——みね

大西氏

某
—
十
与
五郎
—
善之進

「太一郎

「格之助

「いく

「女

「平八郎

「ゆう

「松次郎

十
—
—
—
—
卜

「忠之丞」

大塩氏

「平八郎

「喜内一政之丞」

某一ト

「志摩

「助左衛門

「

「「癸太郎

「とく

「いく

「新次郎

「ゑい

「辰三郎

宮脇氏

日向一上りか

「むつ

是年平八郎後素の祖父成余四十二歳、父敬高二十四歳。

六年甲寅 平八郎三歳。成余四十三歳。敬高二十五歳。

七年乙卯 平八郎三歳。成余四十四歳。敬高二十六歳。

八年丙辰 平八郎四歳。成余四十五歳。敬高二十七歳。橋本忠兵

衛生る。

九年丁巳 平八郎五歳。成余四十六歳。敬高二十八歳。

十年戊午 平八郎六歳。成余四十七歳。敬高二十九歳。大黒屋和

市の女ひろ生る。後橋本氏ゆうと改名し、平八郎の妾めかけとなる。

十一年己未 平八郎七歳。成余四十八歳。五月十一日敬高三十歳にして歿す。平八郎の弟忠之丞生る。

十二年庚申 平八郎八歳。成余四十九歳。七月二十五日忠之丞歿す。九月二十日平八郎の母大西氏歿す。

享和元年辛酉 平八郎九歳。成余五十歳。宮脇りか生る。

二年壬戌 平八郎十歳。成余五十一歳。

三年癸亥 平八郎十一歳。成余五十二歳。

文化元年甲子 平八郎十二歳。成余五十三歳。

二年乙丑 平八郎十三歳。成余五十四歳。

三年丙寅 平八郎十四歳。此頃番方見習となる。成余五十五歳。

四年丁卯 平八郎十五歳。家譜を読みて志を立つ。成余五十六歳。

五年戊辰 平八郎十六歳。成余五十七歳。

六年己巳 平八郎十七歳。成余五十八歳。

七年庚午 平八郎十八歳。成余五十九歳。豊田貢斎藤伊織に離別

せられ、水野軍記の徒弟となる。

八年辛未 平八郎十九歳。成余六十歳。

九年壬申 平八郎二十歳。成余六十一歳。

十年癸酉 平八郎二十一歳。始て学問す。成余六十二歳。西組与

力弓^{ゆげ}削新右衛門地方役たり。

十一年甲戌 平八郎二十二歳。此頃竹上万太郎平八郎の門人となる。成余六十三歳。

十二年乙亥 平八郎二十三歳。成余六十四歳。

十三年丙子 平八郎二十四歳。成余六十五歳。京屋きぬ水野の徒弟となる。

十四年丁丑 平八郎二十五歳。成余六十六歳。

文政元年戊寅 六月二日成余六十七歳にして歿す。平八郎二十六歳にして番代を命ぜらる。妾ゆうを納^いる。二十一歳。宮脇むつ生る。

二年己卯 平八郎二十七歳。

三年庚辰 平八郎二十八歳。目安役並証文役たり。十一月高井山城守実徳東町奉行となる。

四年辛巳 平八郎二十九歳。平山助次郎十六歳にして入門す。四

月坂本鉉之助始て平八郎を訪ふ。橋本みね生る。

五年壬午 平八郎三十歳。

六年癸未 平八郎三十一歳。平八郎の叔父志摩宮脇氏の婿養子となり、りかに配せらる。是年大井正一郎入門す。水野軍記の妻そへ歿す。

七年甲申 平八郎三十二歳。宮脇発太郎生る。庄司義左衛門、堀井儀三郎入門す。庄司は二十七歳。水野軍記大阪木屋町に歿す。八年乙酉 平八郎三十三歳。正月十四日洗心洞学舎東掲西掲を書す。白井孝右衛門三十七歳にして入門す。

九年丙戌 平八郎三十四歳。宮脇とく生る。

十年丁亥 平八郎三十五歳。吟味役たり。正月京屋さの、四月京

屋きぬ、六月豊田貢、閏六月より七月に至り、水野軍記の關係者皆逮捕せらる。さの五十六歳、きぬ五十九歳、貢五十四歳、所謂邪宗門事件なり。

十一年戊子 平八郎三十六歳。吉見九郎右衛門三十八歳にして入門す。十月邪宗門事件評定所に移さる。

十二年己丑 平八郎三十七歳。三月弓削新右衛門糺弾事件あり。

平八郎の妾ゆうちはつ薙髪す。十二月五日邪宗門事件落着す。貢、きぬ、さの、外三人はりつけ磔に処せらる。きぬ、さのは屍しかばねを磔す。是年宮脇い

く生る。上田孝太郎入門す。木村司馬之助、横山文哉まじはりてい交を訂す。

天保元年庚寅 平八郎三十八歳。三月破戒僧檢拳事件あり。七月高井実徳西丸留守居に転ず。平八郎勤仕十三年にして暇を乞ひ、

養子格之助番代を命ぜらる。格之助妾橋本みねを納る。九月平八郎名古屋の宗家を訪ひ、展墓す。頼らいのぼる襄序を作りて送る。十一月大阪に帰る。是年松本隣太夫、茨田軍次、白井儀次郎入門す。松本は甫はじめて七歳なりき。

二年辛卯 平八郎三十九歳。父祖の墓石を天満東寺町成正寺に建つ。吉見英太郎、河合八十次郎入門す。彼は十歳、此は十二歳なり。

三年壬辰 平八郎四十歳。四月頼襄京都より至り、古本だいがくわ大学刮目つもくに序せんことを約す。六月大学刮目に自序す。同月近江国

小川村なる中江藤樹の遺蹟を訪ふ。帰途舟に上りて大溝より坂本に至り、風波に逢ふ。秋頼襄京都に病む。平八郎往いて訪へば既

に亡^なし。是年宮脇いくを養ひて女とす。柴屋長太夫三十六歳にし
て入門す。

四年癸巳 平八郎四十一歳。四月 洗心洞^{せんしんどう}割記^{さつぎ}に自序し、これを

刻す。頼余一に一本を貽^{おく}る。又一本を佐藤坦^{たひら}に寄せ、手書して志

を言ふ。七月十七日富士山に登り、割記を石室に蔵す。八月足代

弘訓^{すゝめ}の勸^{すす}により、割記を宮崎、林崎の両文庫に納^{おさ}む。九月奉^{ほう}納^{なふ}

書^{しよ}籍^{じやく}聚^{くし}跋^{ふつ}に序す。十二月儒門^{じゆもん}空虚^{くうき}聚語^{しゆうご}に自序す。是年

柏岡伝七、塩屋喜代蔵入門す。

五年甲午 平八郎四十二歳。秋 割記附録抄^{さつぎふろくせう}を刻す。十一月孝^{かう}

經^{やうめい}彙^{ちゆう}註^{しゆ}に序す。是年宇津木矩之允入塾す。柏岡源右衛門入門

す。此頃高橋九右衛門も亦入門す。

六年乙未 平八郎四十三歳。四月孝経彙註を刻す。夏割記及附録抄の版を書估しよこに与ふ。

七年丙申 平八郎四十四歳。七月跡部良弼東町奉行となる。九月格之助砲術を試みんとすと称し、火薬を製す。十一月百目筒三挺を買ひ又借る。十二月檄文を印刷す。同月格之助の子弓太郎生る。安田図書、服部末次郎入門す。宇津木矩之允再び入塾す。天保四年以後飢饉にして、是歳最も甚し。

八年丁酉（一八三七年） 平八郎四十五歳。正月八日吉見、平山、庄司連判状に署名す。十八日柏岡源右衛門、同伝七署名す。二十八日茨田、高橋署名す。是月白井孝右衛門、橋本、大井も亦署名す。二月二日西町奉行堀利堅就任す。七日ゆう、みね、弓太郎、

いく般若寺村橋本の家に徙る^{うつ}。上旬中書籍を売りて、金を窮民に施す。十三日竹上署名す。吉見父子平八郎の陰謀を告発せんと謀^{はか}る。十五日上田署名す。木村、横山も亦此頃署名す。十六日より与党日々平八郎の家に会す。十七日夜平山陰謀を跡部に告発す。十八日曉^{あけ}六時跡部平山を江戸矢部定謙の許^{もと}に遣^やる。堀と共に次日市内を巡視することを停^{とど}む。十九日曉七時吉見英太郎、河合八十次郎英太郎が父の書を懷^{ふところ}にして、平八郎の陰謀を堀利堅に告発す。東町奉行所に跡部平八郎の与党小泉淵次郎を斬らしめ、瀬田濟之助を逸す。瀬田逃れて平八郎の家に至る。平八郎宇津木を殺さしめ、朝五時事を挙ぐ。昼九時北浜に至る。鴻池等を襲ふ。跡部の兵と平野橋、淡路町に闘ふ。二十日夜兵火息^やむ。二十四日夕平八

郎父子油懸町美吉屋五郎兵衛の家に潜^{ひそ}む。三月二十七日平八郎父子死す。

九年戊戌 八月二十一日平八郎等の獄定まる。九月十八日平八郎以下二十人を鳶田に磔す。竹上一人を除く外、皆屍^{しかばね}なり。十月江戸日本橋に捨札を掲ぐ。

二月十九日中の事を書くに、十九日前の事を回顧する必要があるやうに、十九日後の事も多少書き足さなくてはならない。それは平八郎の末路を明にして置きたいからである。平八郎は十九日の夜大阪下寺町を彷徨してゐた。それから二十四日の夕方同所油懸町的美吉屋に来て潜伏するまでの道行は不確である。併し下寺町で平八郎と一しよに彷徨してゐた渡辺良左衛門は河内国志紀郡

田井中村で切腹してをり、瀬田濟之助は同国高安郡恩地村で縊^い死^ししてをつて、二人の死骸は二十二日に発見せられた。そこで大阪下寺町、河内田井中村、同恩地村の三箇所を貫いて線を引いて見ると、大阪から河内国を横断して、大和国に入る道筋になる。平八郎が二十日の朝から二十四日の暮までの間に、大阪、田井中、恩地の間を往反したことは、^{ほとんど}殆^い疑^いを容^いれない。又下寺町から田井中へ出るには、平野郷口から出たことも、^{また}亦推定することが出来る。唯恩^{たゞ}地から先をどの方向にどれ丈歩いたかが不明である。

試みに大阪、田井中、恩地の線を、甚しい方向の変換と行程の延長とを避けて、大和境に向けて引いて見ると、^{かめのせたうげ}龜瀬^は峠^は南に偏し、十三峠は北に偏してゐて、恩地と相隣してゐる服部川^{はつとりがは}

から信貴越しきぎしえをするのが順路だと云ひたくなる。かう云ふ理由で、私は平八郎父子に信貴越をさせた。そして美吉屋を叙する前に、信貴越の一段を挿入した。

二月十九日後の記事は一、信貴越 二、美吉屋 三、評定と云ふことになった。

平八郎が暴動の原因は、簡単に言へば飢饉である。外に種々の説があつても、大抵揣摩しまである。

大阪は全国の生産物の融通分配を行つてゐる土地なので、どの地方に凶歉きようけんがあつても、すぐに大影響かうむを被る。市内の賤民が飢饉に苦むのに、官吏や富豪が奢侈ほしいまを恣にしてゐる。平八郎はそ

それを憤^{いきどほ}つた。それから幕府の命令で江戸に米を回^{くわいさう}漕^{そう}して、京都へ遣^やらない。それをも不公平だと思つた。江戸の米の需要に比すれば、京都の米の需要は極^{ごく}僅少であるから、京都への米の運送を絶たなくても好きさうなものである。全国の石^{こく}高^{たか}を幕府、諸大名、御料、皇族並公卿、社寺に配当したのを見るに、左の通である。

	石高実数（単位万石）	全国石高に対する百分比例
徳川幕府	800	29.2
諸大名	1900	69.4
御料	3	0.1
皇族并公卿	4.7	0.2

社寺

30

1.2

計

2737.7

100

天保元年、二年は豊作であつた。三年の春は寒気が強く、氣候が不順になつて、江戸で白米が小売百文に付五合になつた。文政頃百文に付三升であつたのだから、非常な騰貴である。四年には出羽の洪水のために、江戸で白米が一両に付四斗、百文に付四合とまでなつた。卸値おろしねは文政頃一両に付二石であつたのである。五年になつても江戸で最高価格が前年と同じであつた。七年には五月から寒くなつて雨が続き、秋洪水があつて、白米が江戸で一両に付一斗二升、百文に付二合とまでなつた。大阪では江戸程の

騰貴を見なかつたらしいが、当時大阪総年寄をしてゐた今井官之助、後に克復と云つた人の話に、一石二十七匁五分の白米が二百匁近くなつてゐたと云ふことである。いかにも一石百八十七匁と云ふ記載がある。金一両銀六十匁錢六貫五百文の比例で換算して見ると、平常の一石二十七匁五分は一両に付二石一斗八升となり、一石百八十七匁は一両に付三斗二升となる。百文に付四合九勺である。此年の全国の作割と云ふものがある。

五畿内東山道 45%

東海道 45

関八州 30—40

奥州 28

羽州	40
北陸道	54
山陰道	32
山陽道及南海道	55
西海道	50

○ 42.4%

これから古米食込高一二%を入れ戻せば、三〇、四%の収穫となる。七年の不良な景況は、八年の初になつても依然としてゐた。江戸で白米が百俵百十五両、小売百文に付二合五勺、京都の小売

相場も同じだと云ふ記載がある。江戸の卸値は二斗五升俵として換算すれば、一両に付三斗四合である。

平八郎は天保七年に米価の騰貴した最中に陰謀を企てて、八年二月に事を挙げた。貧民の身方になつて、官吏と富豪とに反抗したのである。さうして見れば、此事件は社会問題と關係してゐる。勿論社会問題と云ふ名は、西洋の十八世紀末に、工業に機関を用するやうになり、大工場が起つてから、企業者と労働者との間に生じたものではあるが、其萌芽はどここの国にも昔からある。貧富の差から生ずる衝突は皆それである。

若し平八郎が、人に貴賤貧富の別のあるのは自然の結果だから、成行の儘に放任するが好いと、個人主義的に考へたら、暴動は起

さなかつたらう。

若し平八郎が、国家なり、自治団体なりによつて、当時の秩序を維持してゐながら、救済の方法を講ずることが出来たら、彼は一種の社会政策を立てただらう。幕府のために謀ることは、平八郎風情には不可能でも、まだ徳川氏の手^{ふせい}に帰せぬ前から、自治団体として幾分の発展を遂げてゐた大阪に、平八郎の手腕^{ふる}を揮はせる余地があつたら、暴動は起らなかつただらう。

この二つの道が塞がつてゐたので、平八郎は当時の秩序を破壊して望^{のぞみ}を達せようとした。平八郎の思想は未だ醒覺せざる社会主義である。

未だ醒覺せざる社会主義は、独り平八郎が懷抱してゐたばかり

ではない。天保より前に、天明の飢饉と云ふのがあつた。天明七年には江戸で白米が一両に付一斗二升、小売百文に付三合五勺になつた。此年の五月十二日に大阪で米屋こはしと云ふことが始まつた。貧民が群をなして米店を破壊したのである。同月二十日には江戸でも米屋こはしが起つた。赤坂から端緒を發して、破壊せられた米商富人の家が千七百戸に及んだ。次いで天保の飢饉になつても、天保七年五月十二日に大阪の貧民が米屋と富家とを襲撃し、同月十八日には江戸の貧民も同じ暴動をした。此等の貧民の頭の中には、皆未だ醒覺せざる社会主義があつたのである。彼等は食ふべき米を得ることが出来ない。そして富家と米商とが其資本を運轉して、買占其他の策を施し、貧民の膏血を^か涸らして自ら

肥えるのを見てゐる。彼等はこれに処するにどう云ふ方法を以てして好いか知らない。彼等は未だ醒覺してゐない。唯盲目な暴力を以て富家と米商とに反抗するのである。

平八郎は極言すれば米屋こはしの雄である。天明に於いても、天保に於いても、米屋こはしは大阪から始まつた。平八郎が大阪の人であるのは、決して偶然ではない。

平八郎は哲学者である。併しその良知の哲学からは、頼もしい社会政策も生れず、恐ろしい社会主義も出なかつたのである。

平八郎が陰謀の与党は養子格之助、叔父宮脇志摩を除く外、殆皆門人である。それ以外には家塾の賄^{まかなひ}方^{かた}、格之助の若党^ち、殆

ゆうげん

間、瀬田済之助の若党、中間、大工が一人、獵師が一人ゐる位のものである。橋本忠兵衛は平八郎の妾の義兄、格之助の妾の実父であるが、これも同時に門人になつてゐた。

暴動の翌年天保九年八月二十一日の裁決によつて、磔に処せられた二十人は左の通である。

大塩平八郎 美吉屋にて自刃す

大塩格之助 東組与力西田青太夫実子 美吉屋にて死す

渡辺良左衛門 東組同心 河内田井中にて切腹す

瀬田済之助 東組与力 河内恩地にて縊死す

小泉淵次郎 郡山柳沢甲斐守家来春木弥之助実子、東組与力

養子 東町奉行所にて斬らる

庄司義左衛門 河内丹北郡東瓜破村助右衛門実子、東組同心
養子 奈良にて捕はる

近藤梶五郎 東組同心 自宅焼跡にて切腹す

大井正一郎 玉造口与力倅 京都にて捕はる

深尾才次郎 河内交野郡尊延寺村百姓 能登にて自殺す

茨田郡次 河内茨田郡門真三番村百姓 支配役場へ自首す

高橋九右衛門 河内茨田郡門真三番村百姓 支配役場へ自首
す

柏岡源右衛門 摂津東成郡般若寺村百姓 支配役場へ自首す

柏岡伝七 同上倅 自宅にて捕はる

西村利三郎 河内志紀郡弓削村百姓 江戸にて願人となり病

死す

宮脇志摩 摂津三島郡吹田村神主 自宅にて切腹入水す

橋本忠兵衛 摂津東成郡般若寺村庄屋 京都にて捕はる

白井孝右衛門 摂津守口村百姓兼質屋 伏見に往く途中豊後

橋にて捕はる

横山文哉 肥前三原村の人、摂津東成郡森小路村の医師とな

る 捕はる

木村司馬之助 摂津東成郡猪飼野村百姓 捕はる

竹上万太郎 弓奉行組同心 捕はる

次に左の十一人は獄門に処せられた。

松本隣太夫 大阪船場医師倅 捕はる

堀井儀三郎 播磨加東郡西村百姓 捕はる

杉山三平 大塩塾賄方 伏見に往く途中豊後橋にて捕はる

曾我岩蔵 大塩若党 大阪にて捕はる

植松周次 瀬田若党 京都にて捕はる

作兵衛 天満北木幡町大工 京都にて捕はる

金助 摂津東成郡下辻村獵師 捕はる

美吉屋五郎兵衛 油懸町手拭地職 自宅にて捕はる

浅佶 瀬田中間 捕はる

新兵衛 河内尊延寺村無宿、深尾才次郎の募に応ず 捕はる

忠右衛門 同村百姓、同上 捕はる

次に左の三人は死罪に処せられた。

上田孝太郎 摂津東成郡沢上江村百姓 捕はる

白井儀次郎 河内渋河郡衣摺村百姓、白井孝右衛門従弟 捕

はる

卯兵衛 摂津東成郡般若寺村百姓 捕はる

次に左の四人は遠島に処せられた。

大西与五郎 東組与力、平八郎の母兄 捕はる

白井彦右衛門 孝右衛門倅 大和に往く途中捕はる

橋本氏ゆう 実は曾根崎新地茶屋町大黒屋和市娘ひろ 京都

にて捕はる

美吉屋つね 五郎兵衛妻 自宅にて捕はる

次に左の三人は追放に処せられた。

安田図書 伊勢山田外宮御師 淡路町附近にて捕はる

寛輔 堺北糸町医師、西村の姉婿、西村の逃亡を幫助ほうじよす

捕はる

正方 河内渋河郡大蓮寺隱居、杉山の伯父にして杉山をして

剃髪せしむ 捕はる

以上重罪者三十一人の中で、刑を執行せられる時生存してゐた

ものは、竹上、杉山、上田、大西、白井彦右衛門の五人丈である。

他の二十六人は悉く死んでゐて、内平八郎、渡辺、瀬田、近藤、

深尾、宮脇六人は自殺、小泉は他殺、格之助は他殺の疑、西村は

逮捕せられずに病死、残余の十七人は牢死である。九月十八日に

は鳶田で塩詰しほづめにした屍首を磔はりつけ柱ばしら、獄門台に懸かけた。江戸

で願^{ぐわんにんぼうず}人坊主になつて死んだ西村丈^{だけ}は、浅草遍照院に葬^{はうむ}つた死骸が腐つてゐたので、墓^{こぼ}を毀たれた。

当時の罪人は一年以内には必ず死ぬる牢屋に入れられ、死んでから刑の宣告を受け、塩詰にした死骸を磔柱などに懸けられたものである。これは独^{ひとり}平八郎の与党のみではない。平八郎が前に吟味役として取り扱つた邪宗門事件の罪人も、同じ処置に逢つたのである。

近い頃のロシアの小説に、謔^{うそ}を衝かぬ小学生徒と云ふものを書いたのがある。我事も人の事も、有の儘を教師に告げる。そこで傍^{ばうはい}輩に憎まれてゐたたまらなくなるのである。又ドイツの或る

新聞は「小学教師は生徒に傍輩の非行を告発することを強制すべきものなりや否や」と云ふ問題を出して、諸方面の名士の答案を募つた。答案は区々まちくであつた。

個人の告発は、現に諸国の法律で自由行為になつてゐる。昔は一步進んで、それを褒むほべき行為にしてゐた。秩序を維持する一の手段として奨励したのである。中にも非行の同類が告発をするのを返かへりちゆう忠と称して、これに忠と云ふ名を許すに至つては、奨励の最顯著なるものである。

平八郎の陰謀を告発した四人は皆其門人で、中で単に手先に使はれた少年二人を除けば、皆其与党である。

平山助次郎 東組同心 暴動に先だつこと二日、東町奉行跡

部良弼に密訴す

吉見九郎右衛門 東組同心 暴動当日の味爽まいさう、西町奉行堀

利堅に上書す

吉見英太郎 九郎右衛門倅 九郎右衛門の訴状を堀に呈す

河合八十次郎 平八郎の陰謀に与くみし、半途にして逃亡し、遂

に行方不明になりし東組同心郷左衛門の倅せがれなり、陰謀事件の

関係者中行方不明になりしは、此郷左衛門と近江小川村医師

志村力之助との二人のみ 九郎右衛門の訴状を堀に呈す

評定の結果として、平山、吉見は取高の儘小普請入こぶしんを命ぜられ、

英太郎、八十次郎の二少年は賞銀を賜はつた。然るに平山は評定

の局を結んだ天保九年閏四月八日うるふと、それが発表せられた八月二

十一日との中間、六月二十日に自分の預けられてゐた安房勝山の城主酒井大和守^{ただより}忠和^{やしき}の邸で、人間らしく自殺を遂げた。

青空文庫情報

底本：「鷗外歴史文学集 第二巻」岩波書店

2000（平成12）年10月10日発行

入力：kompass

校正：小林繁雄

2001年12月13日公開

2004年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

大塩平八郎

森鷗外

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>